四国横断自動車道建設にともなう
埋蔵文化財発掘調査実績報告

昭和60年度

1986年3月

日本道路公団
香川県教育委員会

例　　言

1．本書は，四国横断自動車道建設にともない昭和60年度に実施した発掘調査の実績報告書である。

2．調査は日本道路公団高松建設局の委託をうけ，香川県教育委員会事務局文化行政課が実施した。

調査組織は下記のとおりである。

総括	課長	磯田文雄（～12．20）
	教育次長 課長事務取扱	樫原　悠（12．21～）
	主幹	松本豊胤
	課長補佐	片山　堯
庶務	係長	宮谷昌之
	主任主事	前田和也

連絡事務所 総括	所長	入江　久（嘱託）
調査担当	係長	伊沢肇一
	文化財専門員	岸上康久
	〃	渡部明夫（11．21～）
	〃	廣瀬常雄（～11．20）
	主任技師	藤好史郎（～4．30）
	〃	真鍋昌宏
	〃	小西正行
	〃	野中寛文
	技師	薦田耕作
	〃	三好彩三
	〃	西岡達哉
	嘱託	藤田耕正
	〃	片桐孝浩
	〃	田淵裕司
	〃	今井和彦
	〃	磯崎　寛
	〃	株木　彰

3．本書は，各担当者が協議した成果を取りまとめ，伊沢・真鍋が編集した。

目　　次

Ⅰ　昭和60年度発掘調査事業概要……1

Ⅱ　各遺跡の調査……4

永井遺跡……4

多度郡条里吉原B_1地区……12

多度郡条里吉原B_2地区……16

矢ノ塚遺跡……20

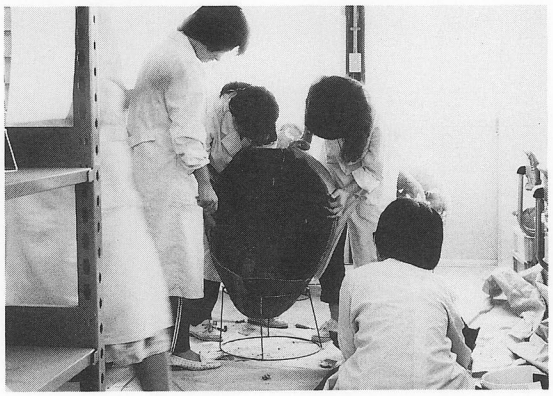
西碑殿遺跡……28

利生寺遺跡（Ⅰ・Ⅱ区）……32

大門遺跡……36

刈田郡条里……43

石田遺跡……51



Ⅰ　昭和60年度発掘調査概要

今年度調査は，４月１日付で日本道路公団高松建設局と『発掘調査委託契約』によって着手した。途中，発掘場所・面積等の変更により２回の変更契約を行った。発掘調査は予備調査を含め13箇所，78,500㎡を実施した。残り54,600㎡は61年度調査となり，今年度終了時で全体(211,500㎡）の74％が完了したことになる。

善通寺地区では５箇所発掘した。永井遺跡は，Ｃ－BOX工事を考慮し，県道多度津・善通寺線から東へ向け発掘した。ところが県道のすぐ脇で幅12m，深さ２m，南東から北西に流下する河川に当った。湧水に悩まされ，当初予定より２ケ月多くの調査期間を要した。自然河川から縄文後晩期の縄文土器が大量に出土した。本県では海浜部の攪乱層からの出土例しかなかっただけに，層位毎の出土は注目される。また，川床には流れに沿って杭列があり貴重な資料となった。

丸亀平野西端から天霧山裾に所在する吉原Ａ地区（矢ノ塚遺跡）は昨年度からの継続調査で，主に道路の北半部7,000㎡を発掘した。弥生時代中期後半・奈良時代及び中世の３期の遺構が検出された。中でも，弥生時代中期の方形掘り方を有する掘立柱建物が12棟確認され，その間を溝が縦横に支走する集落が存在していたことは興味深い。さらに，ミニチュア土器，分銅形土製品，銅剣形土製品の出土は，この時期の精神文化の高さを象徴するものとして注目される。発掘は，道路幅の北半30m，その内10mは工事用道路に占地され，排土置き場の確保に苦慮しながらの調査であった。隣接してＣ－BOX・高架橋工事等戦場さながらの発掘調査となった。

吉原B_2地区は，吉原Ａ終了（8.30）と同時に開始した。調査区の中央で南北に流れをもつ自然河川（幅15m，深さ1.2m）を検出。弥生時代前期の壺や木製鍬（未製品３点）が出土。さらに，その下層より縄文晩期の土器が採取されたが，北側に隣接するバラキ湧水への影響を考え発掘を中止し，吉原B_1地区へ移った。連繋ミスから遺跡の一部で工事が先行する場面があったが，予定通り調査を実施し，中世・近世の遺構を確認した。

西碑殿遺跡は，前年度よりの継続調査となったが，一部買収のメドがつかず１ケ月で調査は中止した。弥生・古代の方形掘り方を有す掘立柱建物群は注目される。

高瀬地区の４遺跡は４月に予備調査を実施し，北条遺跡を本調査から除外した。利生寺遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区（大門遺跡）と順次調査を進め，Ⅲ区で古墳時代後期の竪穴住居跡15棟を検出した（８棟にカマド付設)。11月30日に現地で説明会を実施したところ，200名余参加者があった。航空測量（２回）を行い61年１月28日に終了し，土佐神社へ移った。

延命遺跡Ｂは，59年度より調査してきたが民家移転のメドがたたず５月中旬一時中止し刈田郡条里へ移った。

刈田郡条里は，観音寺平野のほぼ中央に位置し，弥生時代前期・後期から古墳時代の溝状遺構

を多く検出。掘立柱建物は古代の方画地割方向と一致する点，今後の調査に興味がもたれる。当初も，工事用道路が走っており発掘が小間切れにならざるを得ない。

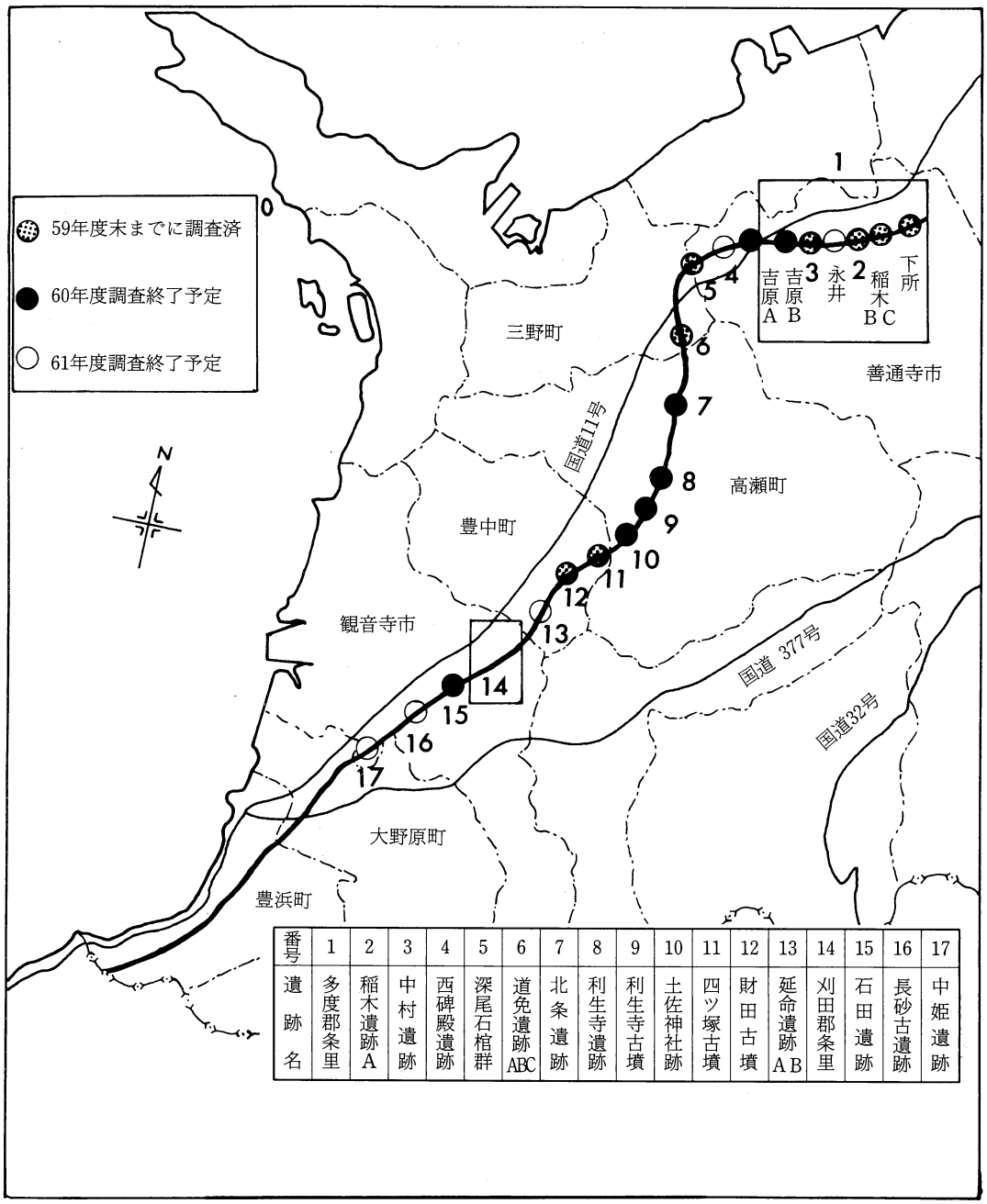
石田遺跡は，地元との協議，作付との関係上予定より１ケ月遅れて５月より調査を開始した。順調に進み61年１月11日には宅地部を残すのみとなった。掘立柱建物を中心とした集落が確認されたが粘土採取のため相当の遺構が消滅していた。

発掘調査はピークを迎え，５班編成，調査補助員２名，現場作業員200名で発掘調査に従事した。また，来年度以降の報告書刊行に備えて基礎整理（職員１名，整理補助員２名，整理員16名）を，吉原Ａ，稲木遺跡など10遺跡について実施した。出土品はコンテナ（28l入）3,100箱を越え，第２収蔵庫を増設した。

発掘調査もいよいよ終盤を迎え，工事関係者との密接な調整がますます重要となってきた。

番号	遺跡名		所在地	面積 ㎡						調査期間
				対象面積	過年度	60年度当初	第1回変更	第2回変更	61年度	
1	多度郡条里	下所遺跡	善通寺市 金蔵寺町下所	17,000	17,000					58. 4. 1～60. 2.28
		稲木B	善通寺市 稲木町下吉田町	17,100	17,100					59. 9.17～60. 2. 8
		稲木C	善通寺市 稲木町下吉田町	4,000	4,000					59. 4. 1～60. 3.30
		（永井遺跡）	善通寺市 下吉田町永井	33,000		19,200	19,200	15,600	17,700	60. 5. 7～
		（矢ノ塚遺跡）	善通寺市碑殿町 吉原町矢ノ塚	11,800	4,800	7,000	7,000	7,000		59.10.16～60. 8.30
		吉原B	善通寺市吉原町	4,900	600	4,300	4,300	4,300		60. 9. 2～61. 1.24
2	稲木A		善通寺市 稲木町下吉田町	300	300					58. 6.29～
3	中村遺跡		善通寺市 中村町筆岡	9,000	9,000					59. 7. 3～59. 9.17
4	西碑殿遺跡		善通寺市碑殿町	5,200	3,000	2,200	2,200	1,400	800	60. 2. 4～
5	深尾石棺群		三野町大見深尾	500	500					59. 9.11～59.10.23
6	道免遺跡	A	三野町大見 道免丸尾							59. 9.11～59.10.23
		B	〃	100	100					〃
		C	〃							〃
7	北条遺跡		高瀬町上高瀬北条	100		100	100	100		
8	利生寺遺跡		高瀬町上勝間砂古	8,700		3,500	8,700	8,700		60. 5.22～61. 1.28
9	利生寺古墳		〃	700		1,000	700	700		60.12. 2～61. 1.28
10	土佐神社跡		高瀬町 上勝間矢ノ岡	2,600		100	2,600	2,600		〃
11	四ツ塚古墳		豊中町笠田笠岡	1,000	1,000					59. 4.16～59. 5.14
12	財田古墳		豊中町上高野	1,000	1,000					58. 9.26～58.11.30
13	延命遺跡	A	〃	5,000	5,000					58.11.28～59. 7.18
		B	〃	13,000	10,000	3,000	3,000	2,000	1,000	59. 7.19～60. 5.15
14	刈田郡条里		観音寺市 本大町古川町	36,100	2,500	22,000	22,000	17,600	16,000	60. 5.15～
15	石田遺跡		観音寺市 池ノ尻町石田	17,200	1,200	16,000	16,000	16,000		60. 5. 1～61. 1.11
16	長砂古遺跡		観音寺市 池ノ尻町長砂古	8,900	1,200	8,000	8,000	2,500	5,200	61. 1.13～
17	中姫遺跡		観音寺市柞田町	14,000	100				13,900	
	合計			211,500	78,400	86,400	93,800	78,500	54,600	

調査一覧表



番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
遺跡名	多度郡条里	稲木遺跡A	中村遺跡	西碑殿遺跡	深尾石棺群	道免遺跡ABC	北条遺跡	利生寺遺跡	利生寺古墳	土佐神社跡	四ツ塚古墳	財田古墳	延命遺跡AB	刈田郡条里	石田遺跡	長砂古遺跡	中姫遺跡

発掘調査位置図

II　各遺跡の調査

永　井　遺　跡

1．立地と環境

永井遺跡は善通寺市中村町島田・榎田及びこれに隣接する下吉田町下所西に所在する。

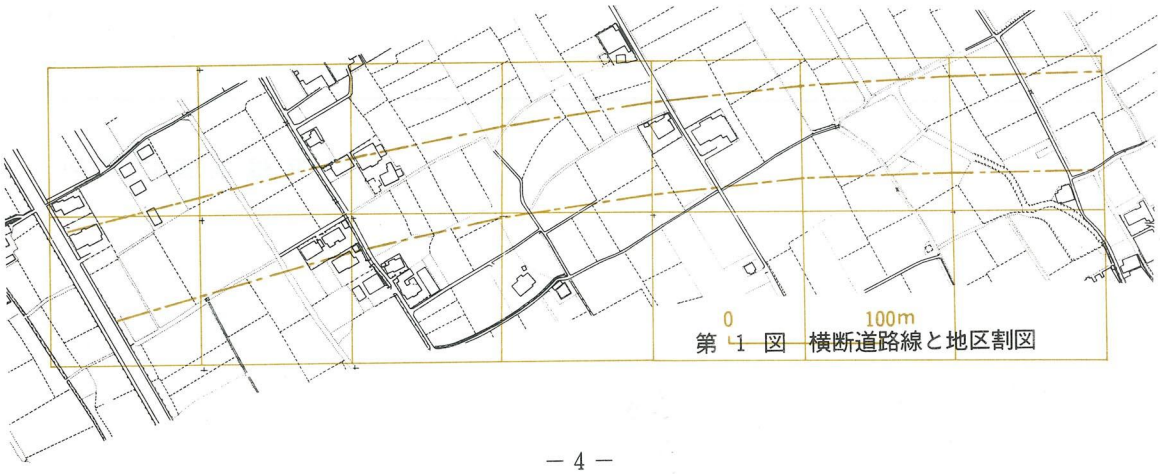
四国横断自動車道の路線にかかる遺跡面積は33,300m²で，西は県道多度津・善通寺線から，東は市道石川永井線までの東西約700mの範囲である。

永井遺跡の存在は，昭和59年10月29日から11月５日まで実施された横断道予定路線内の試掘調査によって発見された。この試掘調査は丸亀平野に遺存する条里の確認を目的として実施したが，中世及び縄文時代の遺物が豊富に出土したため，昭和60年５月７日から全域の本調査が実施されるに至った。

本遺跡は丸亀平野の西部，金蔵川と弘田川に東西を挟まれた沖積平野に立地する。遺跡地の標高は海抜18～20mで，周辺には条里の遺制を示す方形の土地区画に基づいた水田が広がっている。

永井遺跡周辺の遺跡をみると，これまでは南部の五岳山・大麻山の縁辺部に善通寺地域の主要な遺跡が集中する反面，沖積平野地帯では三井遺跡などの弥生時代前期の遺跡がわずかに知られていたにすぎなかった。

しかし，四国横断自動車道の建設に伴い，金蔵寺下所地区・稲木Ｂ地区・Ｃ地区・永井地区・吉原ＢⅠ地区・ＢⅡ地区などで遺跡が確認され，調査されたことによって，縄文時代から古代・中世に至る集落跡が明らかとなった。一方，善通寺地域の縄文時代については，これまで，五条遺跡・金蔵寺下所地区・稲木Ａ地区・吉原ＢⅡ地区などで後晩期の土器片がわずかに出土していたのみであったので，後晩期の遺物を大量に出土した永井遺跡は，この地域の縄文時代を知るうえで，きわめて注目すべき遺跡であるといえよう。



第１図　横断道路線と地区割図

2．遺構について

今年度の調査対象地は，遺跡西端を南北に走る県道多度津・善通寺線から東へ約340m付近まで（Ⅰ～Ⅳ区），面積にして15,700㎡である。

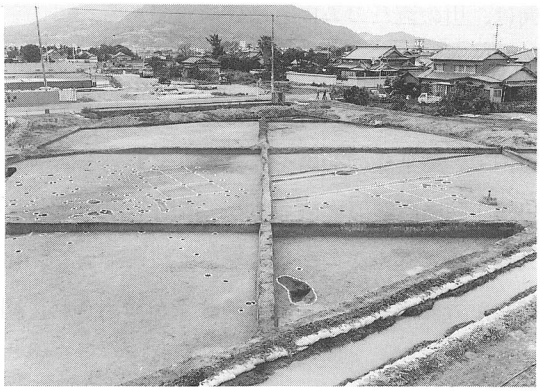
検出した遺構は，掘立柱建物跡，土坑，溝，それに自然河川跡などである。これらは，現在の地表下20cm（耕作土直下）～70cm下で検出された。検出した主な遺構には，縄文時代後晩期の自然河川跡（Ⅰ～Ⅲ区及びⅤ区），中世を中心とする時期と考えられる掘立柱建物跡，その他のものとして，江戸時代の土坑などである。

A掘立柱建物跡

Ⅰ・Ⅲ区で，11棟を検出した。柱穴の形態は，すべて円形を呈している。9棟の主軸方向はN30°Wであるが，他の2棟は，N25°W，N40°Wの方位をとる。

ＳＢ8501

Ｈ－３グリッド（Ⅰ区）で検出された。２×４間（380cm×820cm）の規模をもち，主軸方向はN30°Wである。柱穴からの出土遺物は土師質小皿の破片が数点であり，時期は中世と考えられる。



第２図　ＳＢ8501

ＳＢ8509

Ｆ－８グリッド（Ⅲ区）で検出された。２×２間（380cm×700cm）の規模をもち，主軸方向はN25°Wである。建物を囲む溝から近世と思われる土師質土器を出土している。

B河川跡

ＳＲ8501

Ⅰ区の最西端で，南東から北西に向かって流れたと考えられる，幅約12m，深さ約２ｍの規模をもつ自然河川を検出した。南及び西は調査区外となるため，わずか15m程度の長さしか発掘できなかったが，大量の縄文時代後晩期の遺物が出土した。土層を大別すると上よりⅠ層，黒色粘質土，Ⅱ層，青灰色粘質土，Ⅲ層，青灰色砂，Ⅳ層，青灰色砂礫の順

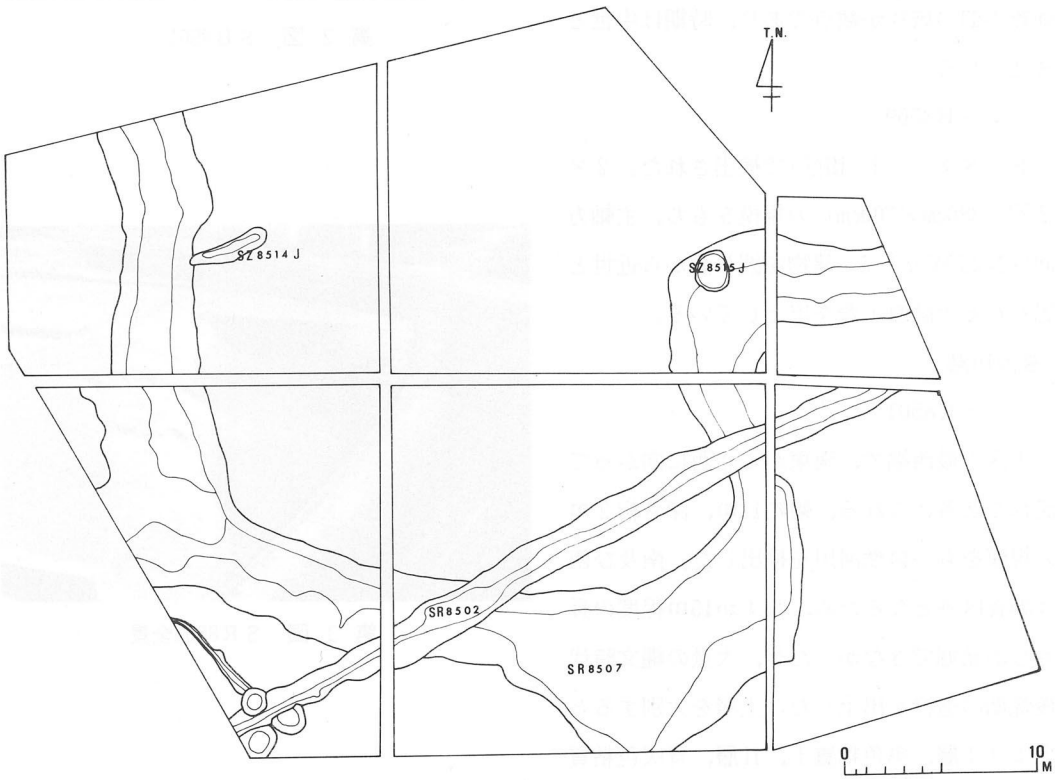
第３図　ＳＲ8501全景

の堆積である。Ⅰ～Ⅲ層までは，縄文時代晩期を中心とする土器と打製石斧，Ⅳ層からは，縄文時代後期の土器及び打製石斧を出土した。特に打製石斧は，Ⅰ～Ⅳ層まで，100点以上出土していることが注目される。また，Ⅲ層の中程から，打ち込まれたと考えられる14本の杭列を検出した。杭の大きさは，おおむね長さ50cm，直径5cm程度である。杭列の方向は，川の流れの方向とほぼ同じである。

第 4 図　ＳＲ8501杭列

ＳＲ8507

Ⅱ・Ⅲ区で，幅約4.5m，深さ約1.1mの規模をもつ，蛇行の激しい自然河川を検出した。調査区内で，総延長約80mを発掘した。土層を大別すると，Ⅰ層，暗灰褐色土，Ⅱ層，灰褐色砂質土，Ⅲ層，砂層の順の堆積であり，Ⅲ層から縄文土器を多量に出土している。また，この自然河川は，大規模な落込みの西南辺に沿って流れており，自然河川の底からさらに下には，この落込みに堆積した青灰色砂層・青灰色砂礫層が検出され，縄文時代後期の土器を主体とする遺物を出土している。



第 5 図　ＳＲ8507平面図（Ⅱ・Ⅲ区）

3．遺物について

60年度の調査では縄文時代から江戸時代に至る各種の遺物が出土しているが，なかでも特に注目されるのは縄文時代の自然河川から大量に出土した土器・石器・杭及び植物性自然遺物である。しかし，これらの大部分については整理がほとんど進んでいないため，ここではＳＲ8501から出土した縄文土器の一部を紹介する。

ＳＲ8501の埋土は，上層からＩ層黒色粘質土，II層青灰色粘質土，III層青灰色砂，IV層青灰色砂礫に大別することができる。Ｉ～III層は縄文時代晩期の土器を，III層下部とIV層からは後期の土器を主に出土するほか，Ｉ層には弥生時代前期の土器もごくわずかに含まれていた。また，各層から打製石斧の出土が多く，総計すれば100点をはるかに越えるものと思われる。

第６図１～５は頸部と胴部外面にヘラまたは半截竹管で施された沈線文を持つ。１は口縁部外面に縄文を持つ。４は縄文地の上に，５は縄文原体を連続して押捺した上に沈線文を施している。これをＩ類と仮称する。

６～12・14～16は横走する直線的な磨消縄文を持つ。３本沈線の内側に縄文を持つもの（６・11）と，縄文部と磨消部を交互に横走させるもの（８～10・12・14・15）があり，特に浅鉢形土器に沈線の多条化の傾向が認められる。14は胎土に結晶片岩を多量に含むことからみて，徳島からの搬入品であろう。以上をII類とする。

III類（13・17・18）は多条化した沈線を持つ。13は沈線間すべてに縄文が施されるが，17は３本の沈線間のみに縄文を持ち，18は縄文を持たない。なお，17は沈線の下に短い平行斜線文を持つ。

IV類（19～26）は肥厚させた口縁部の外面または内面と，胴部外面に縄文を持つ深鉢形土器である。口縁部の肥厚が大きいものは少ない。

Ｖ類（第７図27～33）は，ヘラまたは巻貝による横走する沈線と斜行する刻み目を持つ土器である。33の沈線間には巻貝の先端による刺突文を施す。

VI類（34・35）は巻貝による凹線と，ヘラによると思われる刻み目を持つ。

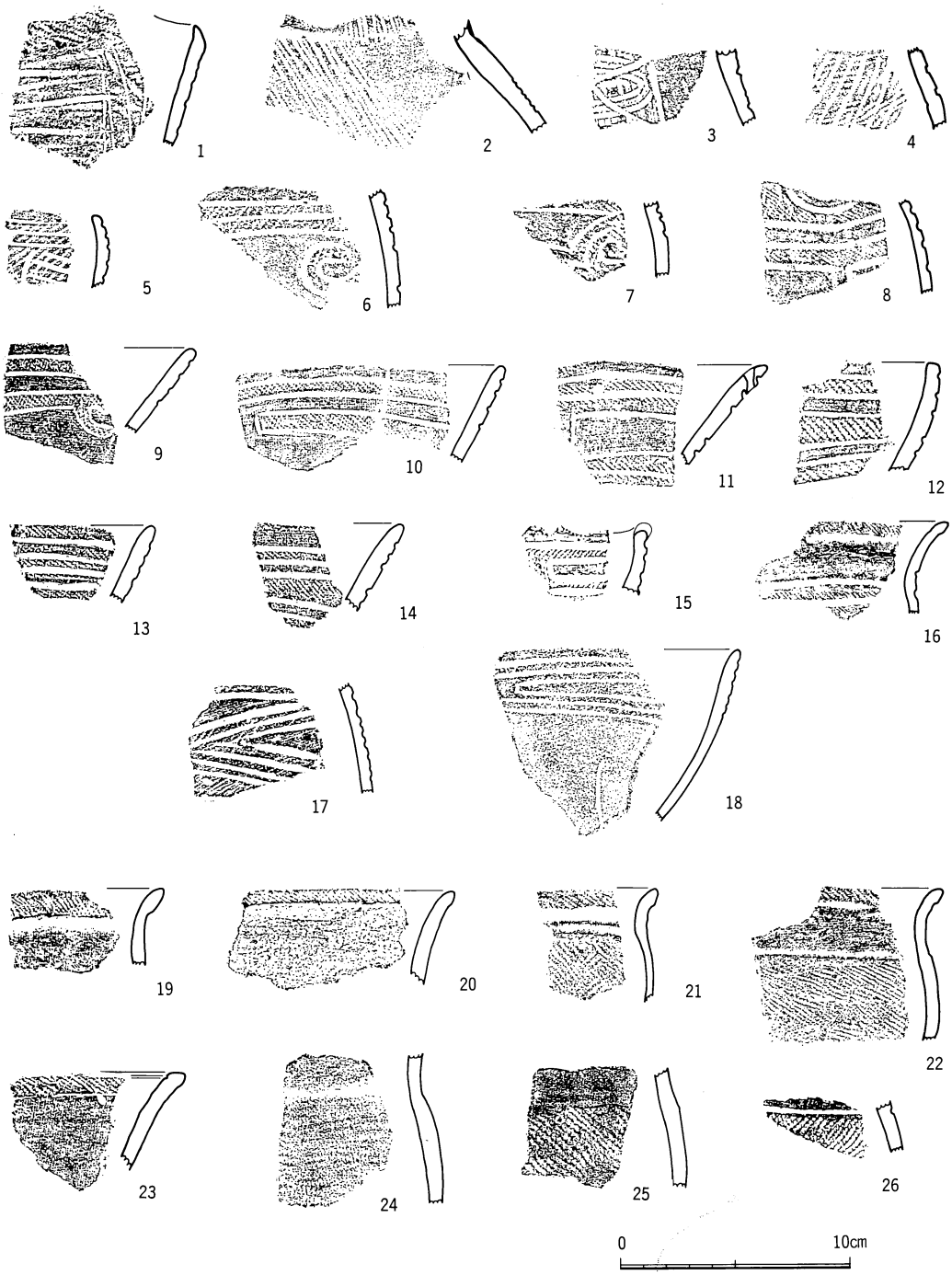
VII類（36～39）は巻貝による凹線を持つ土器である。刻み目はみられない。38の凹線の下部には，巻貝の先端による刺突と，腹部による押捺が施されている。

40は櫛描文を持つ浅鉢形土器と思われる。以上が縄文時代後期の土器である。

41～44は縄文時代晩期の土器である。41は２段の刻み目の間に４条の凸線を配した深鉢形土器で，橿原式に属するものである。

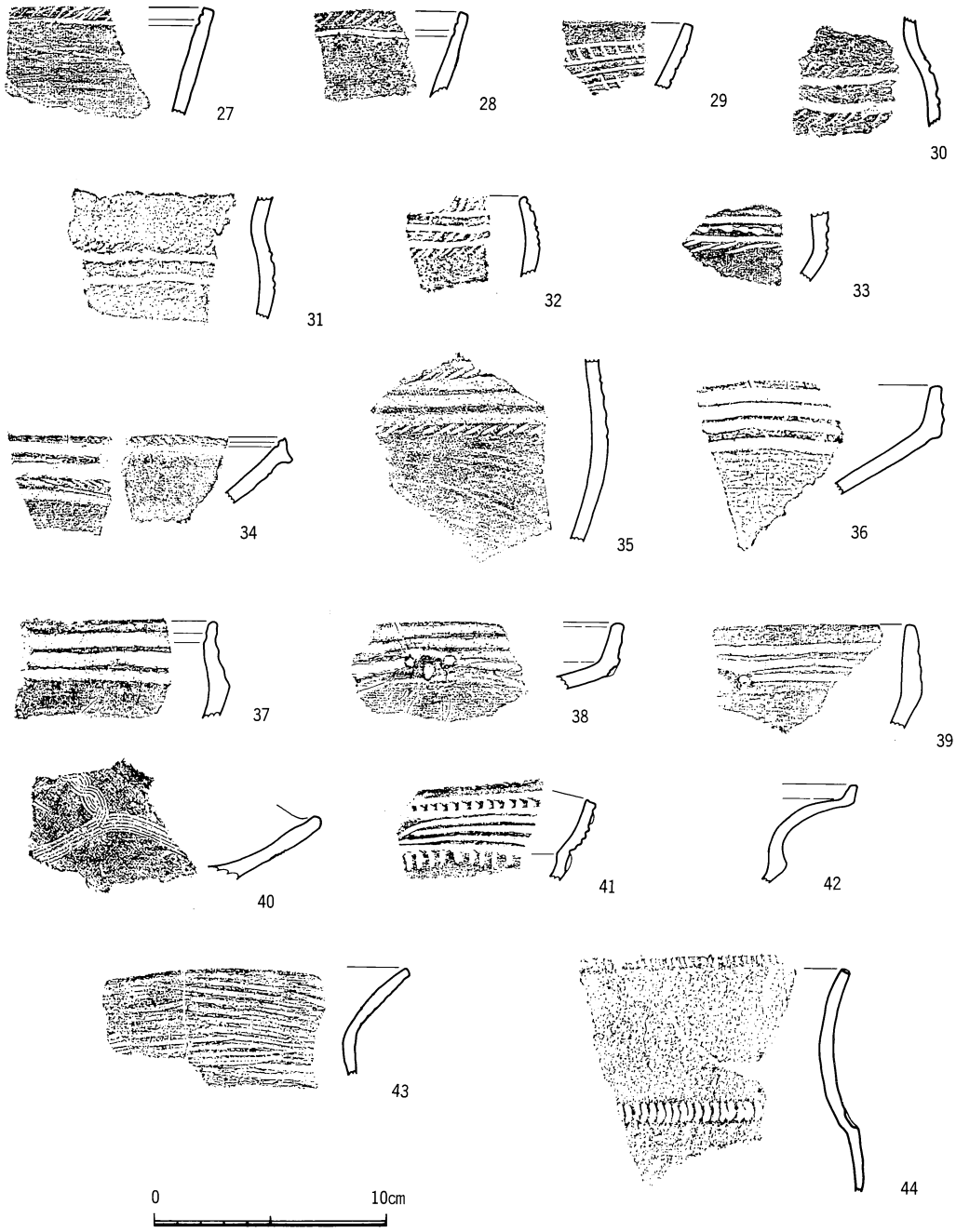
42の深鉢形土器は原下層式に類例が認められる。43の外面には二枚貝の腹縁による条痕が著しい。

多量に出土した縄文晩期の土器は黒土ＢＩ式を前後する時期のものであり，凸帯文土器は出土していない。



I	黒色粘質土	10・22	III・IV	青灰色砂・青灰色砂礫	8・16
III	青灰色砂	5・11	IV	青灰色砂礫	1～4・6・7・9・12～21・23～26

第 6 図　ＳＲ8501出土土器（1）



II　青灰色粘質土　42・43

III　青灰色砂　27～39・41

IV　青灰色砂礫　40

V　層位不明　44

第 7 図　ＳＲ8501出土土器（2）

次に，前述の縄文時代後期土器を中部瀬戸内における既存の編年案に対応させると，ヘラ描きまたは半截竹管による沈線文や条線文を持つＩ類は彦崎ＫＩ式に属するものと考えられる。(注1)

II類には，３条を単位とする細い沈線の内側に縄文を施した磨消縄文を持つものがあり，福田ＫII式の文様と類似する。しかし，II類の文様は器面全体には施されず，口縁部及び体部上半を直線的に横走する。しかも，文様集約部分に曲線的な文様を持つことや，口縁部の拡張，肥厚もほとんど認められず，横走する沈線が多条化の傾向を示していることなどから，福田ＫII式(注2)より新しい時期のものとすべきである。

III類は沈線の多条化がさらに顕著であり，型式的にはII類より後出する。

福田ＫII式に後続するとされる彦崎ＫＩ式・彦崎ＫII式の内容が必ずしも明らかにされていないため，II類，III類との対応関係には不明な点が多いが，II類が福田ＫII式より後出することからみて，II・III類は彦崎ＫＩ式・ＫII式に平行するものと考えられる。

IV類は彦崎ＫＩ式・ＫII式の両期に伴うものであるが，一般的には19のように口縁部の肥厚が大きく，縄文帯の幅が広いものが彦崎ＫＩ式に，20～23のように肥厚が小さく，縄文帯の幅が狭いものが彦崎ＫII式に伴うと考えられている。

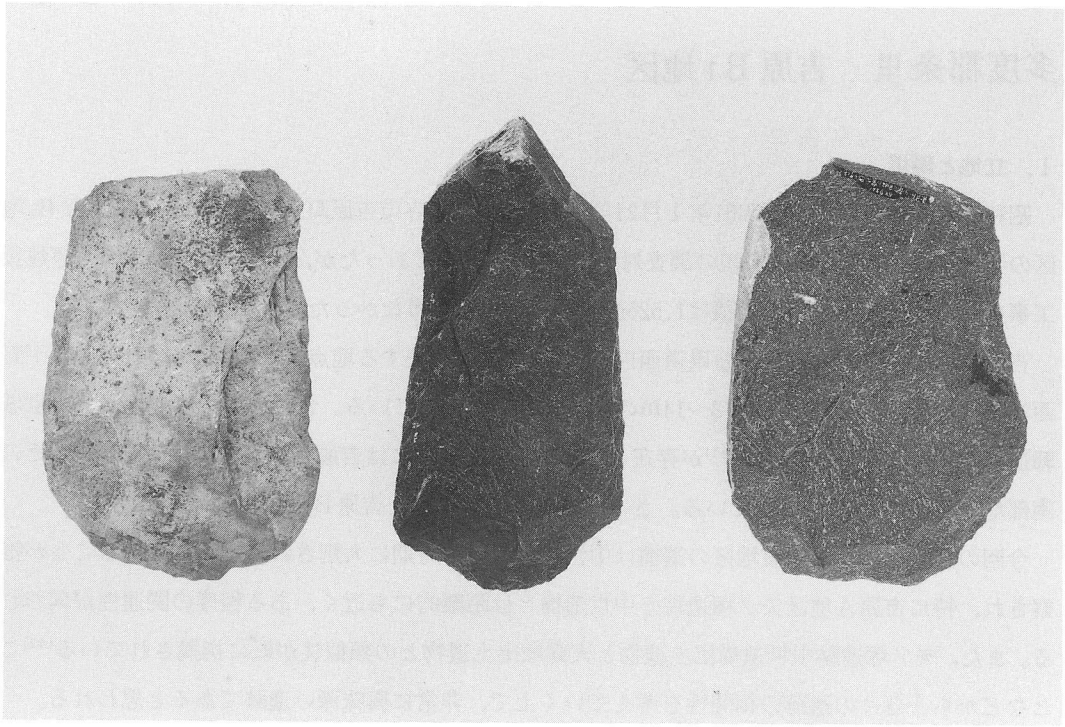
Ｖ類は横走する沈線文と刻み目を特徴とするもので，27と28は馬取式とすることができる。VI類は巻貝による凹線文と刻み目を持つ。Ｖ類とVII類が近しい関係にあることを示す資料である。

VII類は巻貝による凹線文と巻貝の押捺を特徴とし，福田ＫIII式とすることができる。

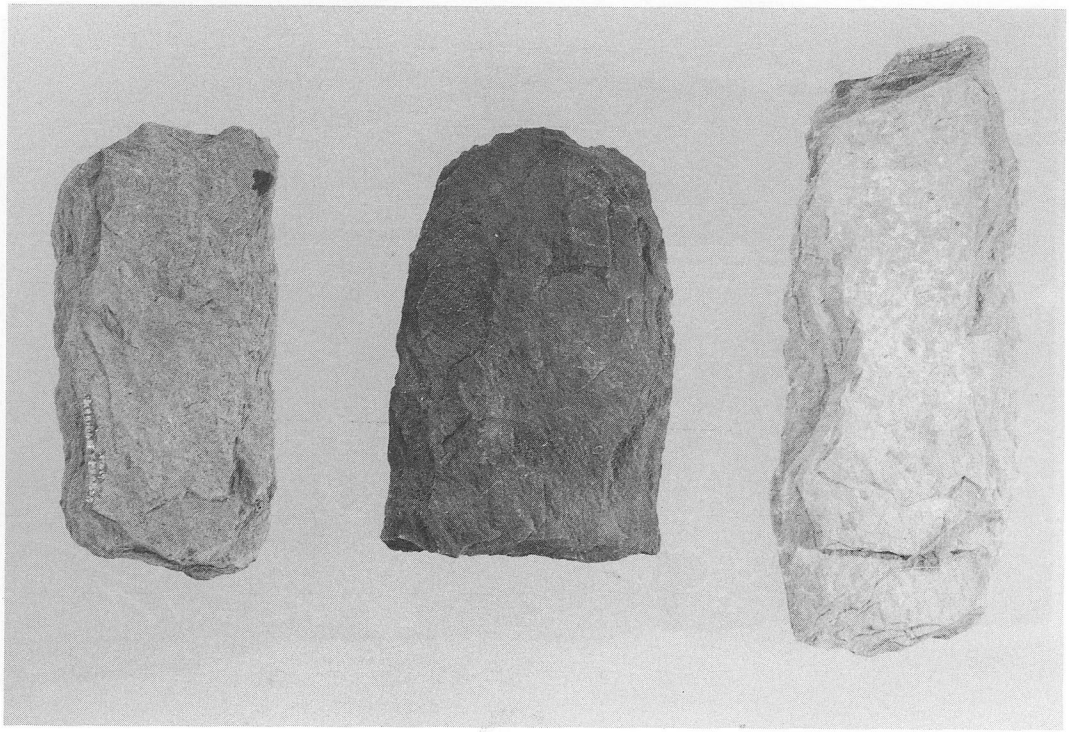
（注）

1．松崎寿和・間壁忠彦「縄文後期文化－西日本」『新版考古学講座』　3　1978
　鎌木義昌・高橋護「縄文文化の発展と地域性－瀬戸内」『日本の考古学』　II　1965

2．横走する沈線の多条化とそれに伴う文様の変化が地域的特色を示している可能性もあり，この面からの今後の検討も必要である。



第 8 図　ＳＲ8501出土石器（1）



第 9 図　ＳＲ8501出土石器（2）

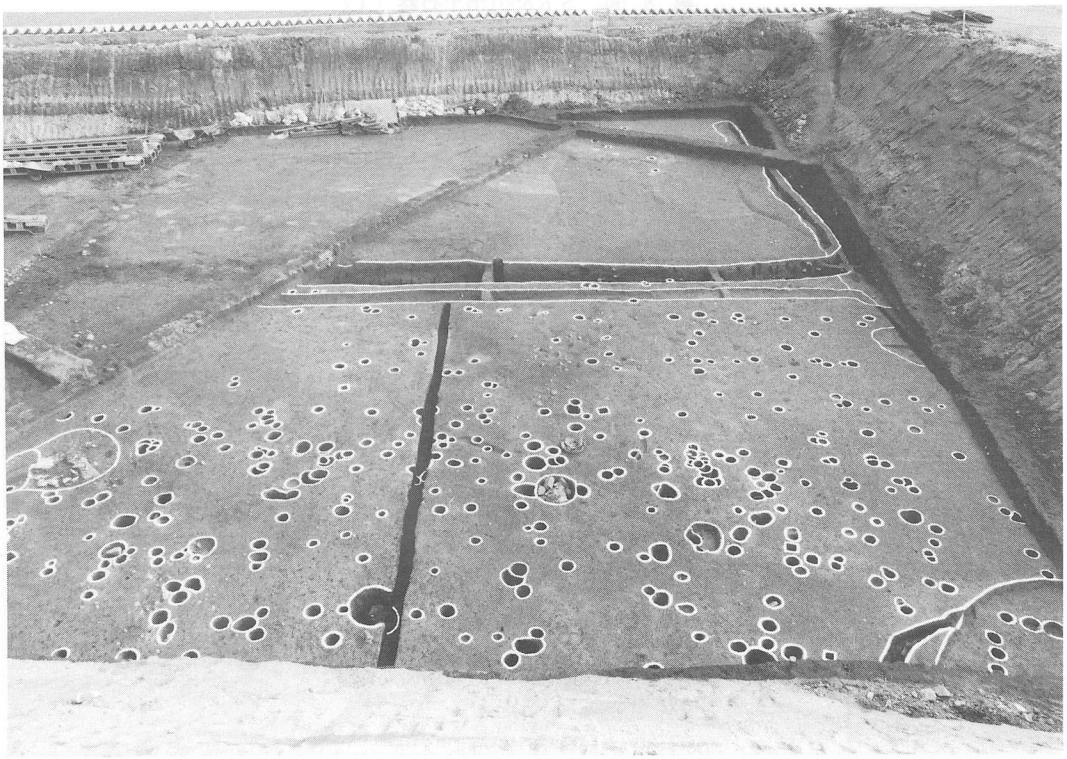
多度郡条里　吉原B1地区

1．立地と環境

昭和60年11月13日より昭和61年1月24日にわたり，善通寺市吉原町上一坊に位置する吉原B_1地区の発掘調査を実施した。当初の調査対象面積は2,800㎡であったが，調査に先行して横断道建設工事に着手したため，実掘面積は1,525㎡に縮小せざるを得なかった。

吉原B_1地区は，国道11号線と県道西白方・善通寺線が交差する地点より南300m付近の丸亀平野西端部に位置しており，標高13～14mの沖積平野に立地している。また，当地区北西には中世城郭遺構で知られる天霧城遺跡(注1)が存在し，天霧山の南裾部には吉原A地区矢ノ塚遺跡，及びその南部地区の遺構(注2)が拡がっている。さらに北東約1kmには，吉原B_2地区が存在する。

今回の調査により，当該地区の遺構は中世と近世の二時期に大別される集落跡であることが推察され，特に吉原A地区矢ノ塚遺跡の中世遺構とは距離的にも近く，ある程度の関連性が伺われる。また，矢ノ塚遺跡中世遺構出土遺物と天霧城出土遺物との類似性が既に指摘されている(注2)ことなどから，各々の遺跡の相関性を考えていく上で，非常に興味深い遺跡であると思われる。



第1図　A列全景（北から）

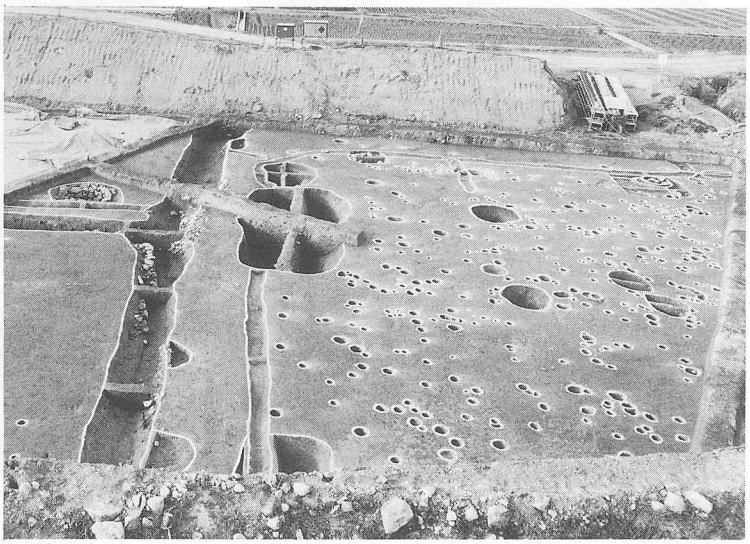
2．遺構

調査で確認された遺構として，多数のピット群の存在を挙げねばならない。検出したピット群のなかには柵列の穴のように非常に小さなものもあったが，その大半は直径20～30cmを呈し，そのうちの幾つかには，未だに柱の下部が残っているものも確認された。残存する柱は全て素掘りの柱穴に直に埋め込まれており，根石は伴っていなかった。但し，柱を固定する目的で柱の横に巨礫を埋め込んだと思われるものは，幾つかのピットで確認している。

これら多数のピット群は，一見，煩雑な拡がりを露呈しているかのようであったが，それでも建物の方向性や規模を検出可能にするような，各々の地点におけるピット群がある程度のグループに分離する傾向が見出された。さらに調査区における，これらのピット群の平面的な拡がりは，北西と南東方向に各々向かっており，これに対し，北東及び南西区画のピット数は著しく低く，希薄であった。（図１，２参照）

さらにまた，中世，近世各々の時期の溝も同時に検出されたが，どちらの時期の溝もＮ－30°－Ｗの方向で北に向かって流れており，途中でＮ－60°－Ｅの方向にほぼ直角にその向きを変えて流れていた。近世の溝においては，この屈曲部分の溝側壁に石を組んでおり，水流による側壁の崩れを防止する目的ではなかったかと思われる。これら両時期の溝は，50cm～１ｍの感覚で走っており前述したピット群も，より正確には溝によって区画された土地の北西と南東に集中しているということができる。この溝の方向性は，矢ノ塚遺跡中世遺構で検出された方向に一致しており，それはまた，丸亀平野西部に認められる条里地割とも一致しているということでもある。

他の遺構としては，井戸及び土坑が検出された。井戸は３基確認されており，１基は土鍋の体部などの出土から中世のものと思われ（ＳＥ01）他の２基（ＳＥ02，03）は，染付などの出土遺物から近世の井戸であろうと推察される。３基とも石組みの井側であり，中世の井戸のそれは上方がやや開く石組みを行っている。近世のものは，２基とも垂直に石を組み上げて井側としていた。（図３参照）



第２図　Ｂ列（南から）

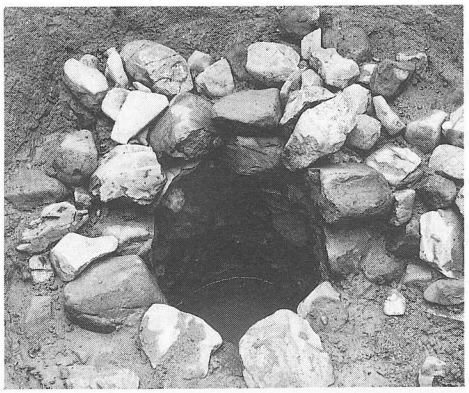
また，土甕は10基ほど検出されたが，土師質の大甕を埋め込んだものと，竹の箍を有する結桶が埋められた土甕が１基ずつ検出された。(図４参照)土師質の大甕は，その底部に12cmほどの穴を穿っていた。これらの土甕の使用目的などは判然としないが，ピット群から推察される建物との相関性は強いように思われる。

３．遺物

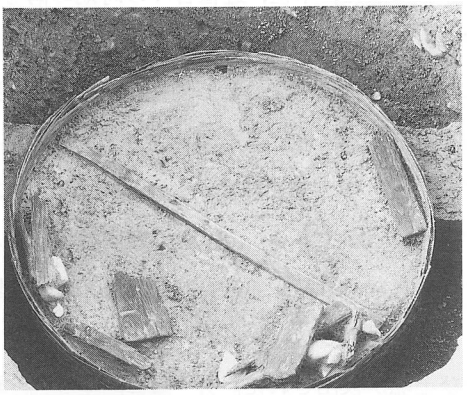
現在，整理中である。従って，特に注目すべき遺物についてのみ記す。

検出された多数のピット群のなかで，ヘラ切り小皿を出土したピットが，計６ケ所存在する。さらにこれらの小皿の上に古銭（主として北宗銭）をのせた状態で検出したピットが２ケ所，古銭のみ出土したピットが２ケ所確認している。(図５，６参照)

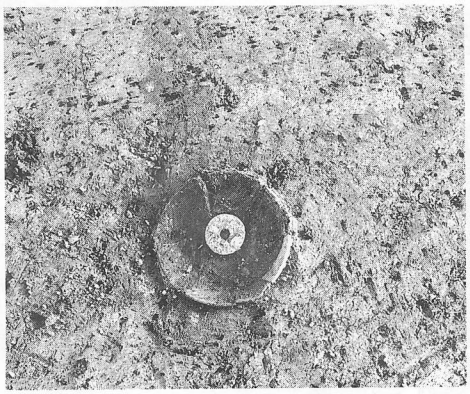
これらの遺物を出土したピットは，すべて南東区画のピット群においてであり，その位置もほぼ一定の間隔で検出されている。



第３図　ＳＥ03

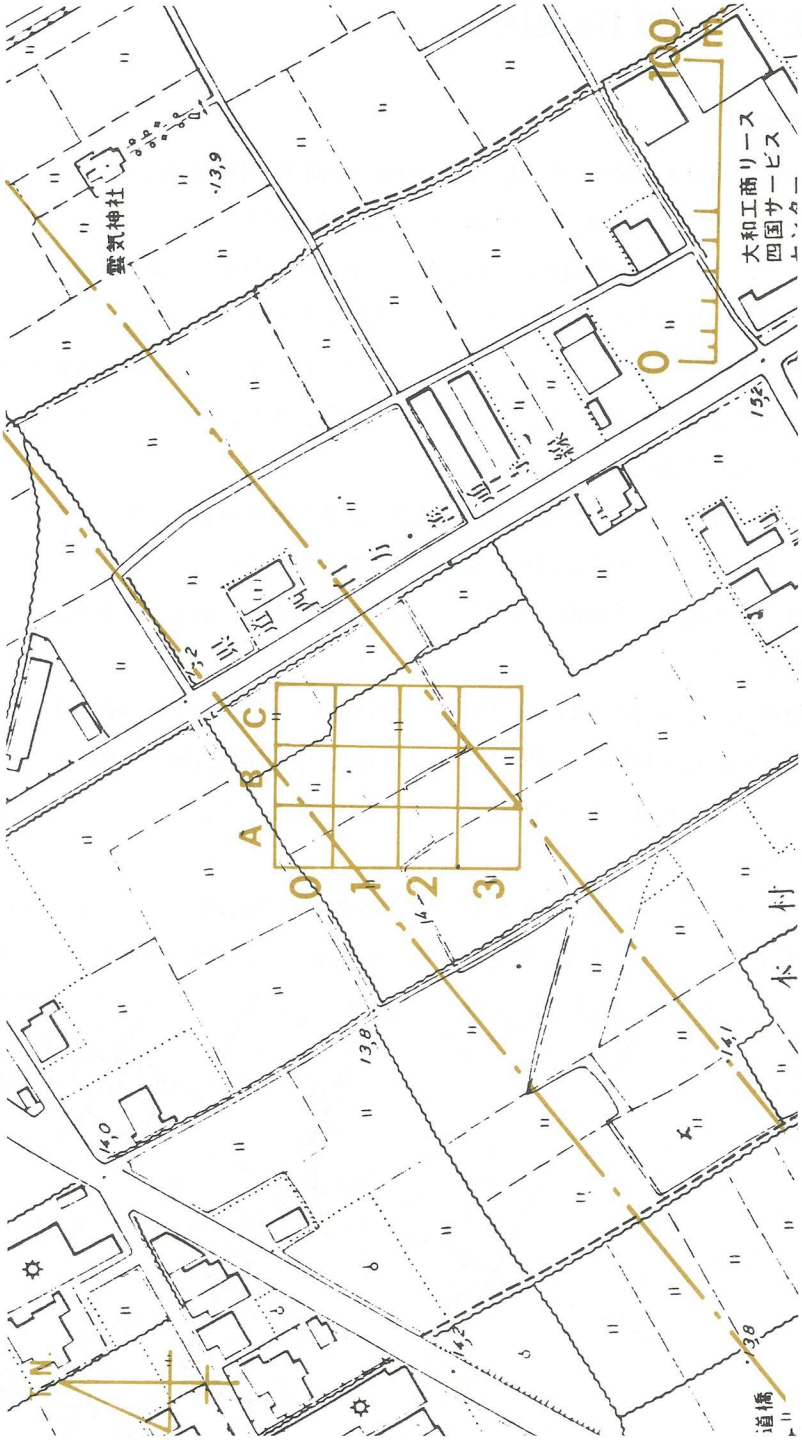


第４図　ＳＫ04



第５図　小皿，古銭出土状況

第６図　小皿，古銭出土状況



吉原B₁地区　地区割図

（注）　1.　天霧城跡発掘調査概報　昭和57年

2.　四国横断自動車道建設にともなう埋蔵文化財発掘調査実績報告　昭和58年度

多度郡条里　吉原Ｂ2地区

１．立地と環境

吉原B_2地区は，県道多度津・善通寺線の西約200m，善通寺市中村町乾に所在する。標高は15～16mを計り，東から西に向けてゆるやかな傾斜を示す沖積平野上にある。

周辺地域には，多度津町三井遺跡，甲山遺跡など弥生時代前期の土器が多数出土している場所があり，この地域が弥生時代の比較的早い頃より開けていたことを示している。中期・後期にはいると，旧練兵場遺跡の一部と考えられる彼ノ宗遺跡から，竪穴式住居跡・甕棺が多数検出されている。また彼ノ宗遺跡より東へ数百メートルの場所で，人間の顔の線刻がある組合せ石棺が昨年の善通寺市の調査で確認されている。

横断道関係の調査では，東に隣接する中村遺跡で，弥生時代の溝状遺構，自然河川，平安時代の溝状遺構，室町時代後半と考えられる掘立柱建物群が検出されている。さらに東で接する永井地区では，縄文時代後期から晩期にかけての土器が多数出土し，現在も調査継続中である。

２．調査の概要

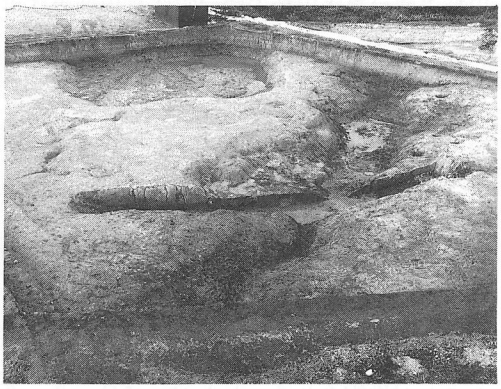
検出した遺構は，弥生時代前期の自然河川（ＳＸ8501）と近世後半の時期が考えられる落ち込み状遺構（ＳＸ8502），同時期の自然河川（ＳＸ8503），明治時代以後の可能性が高い土坑群などである。ここではＳＸ8501とその出土遺物についてのみ記述する。

ＳＸ8501

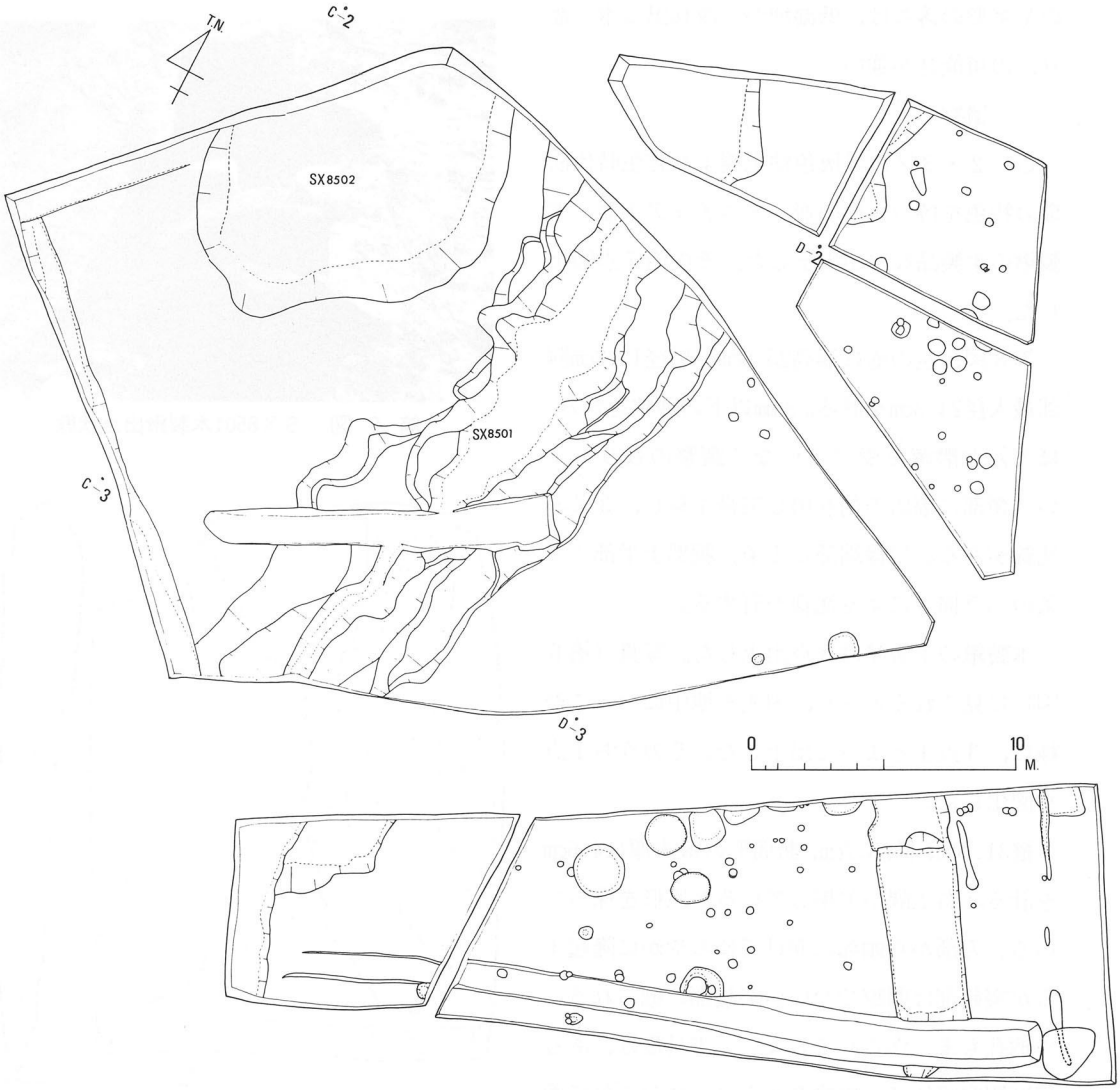
調査区のほぼ中央付近（Ｃ列）で南北方向に流れを持つ自然河川である。幅約15m，深さ約1.2mを計り，断面形はゆるやかなＶ字形を呈する。埋土は大きく３層に分かれる。上層より暗灰黄

第１図　吉原B_2地区割図

第 2 図　発掘風景



第 3 図　ＳＸ8501・ＳＸ8502



第 4 図　Ｃ・Ｄ列遺構配置図

色粘土層→黒灰色粘土層→暗灰青色混黒灰色粘土層となる。

C－2・3区ではV字形の流路が確認できるが，C－4区では東側の落ち（肩）は存在するものの，西側はゆるやかに東から西へ向けて上がっている程度である。その部分の土層に黒色粘土のゆるやかな帯状の上がりが確認できることより，A・B・C－4区付近は低湿地であったことが推察される。したがってC－2・3区のV字形の落ちは，低湿地から流れ出る水の溜り，の可能性が強い。

遺物

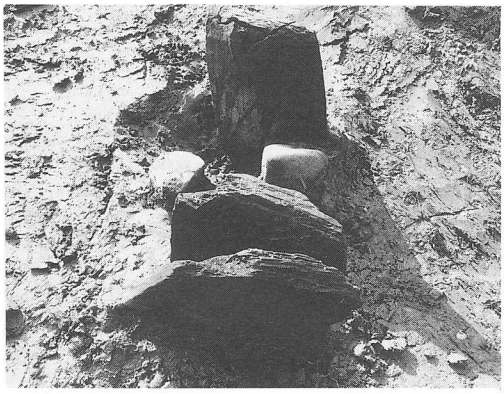
C－2・3区の黒灰色粘土層より弥生時代前期の特色を持つ完形の壺，ミニチュア土器，木製鍬の半製品などが出土した。その内7点図化した。

第8図，左の壺は器高25.6cm，口径13.2cm胴部最大径24.3cmを計る。3㎜以下の砂粒を含み，ほとんど磨滅を受けていなく調整の残りもよい。頸部に幅広の削り出し突帯を有し，3条の沈線がある。口縁端部に1条，胴部上半部に4条のヘラ描きによる沈線を有する。

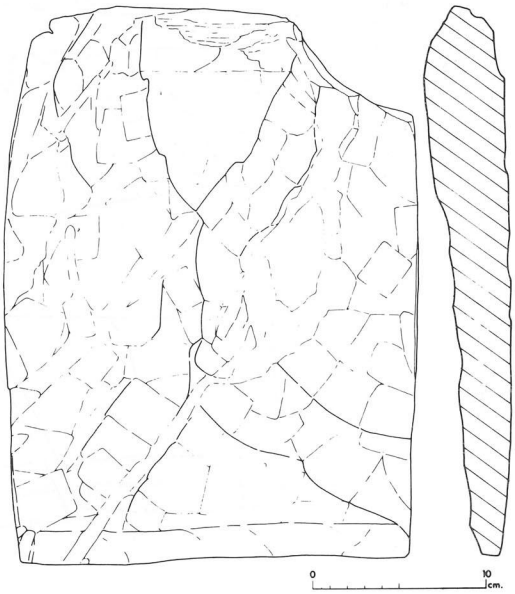
木製鍬の半製品は3点出土した。写真（第6図）に見られるとうり，刃先を地中につっこむ様に，3点まとまって出土した。そのうち1点を図化した。

縦31.3cm，横23.7cm，断面形の最大厚は4.6cmを計る。右上隅が欠損しているが原形を保っている。刃部から頭部に向けてゆるやかに隆起するが突起部は明瞭でない。突起部に掘られるべき柄孔も未だ作られていない。工具痕は，ある程度観察可能で，幅約3cmのノミ状の工具で面が成形されていることが解る。樹種はけやき類

第 5 図　ＳＸ8501土器出土状態



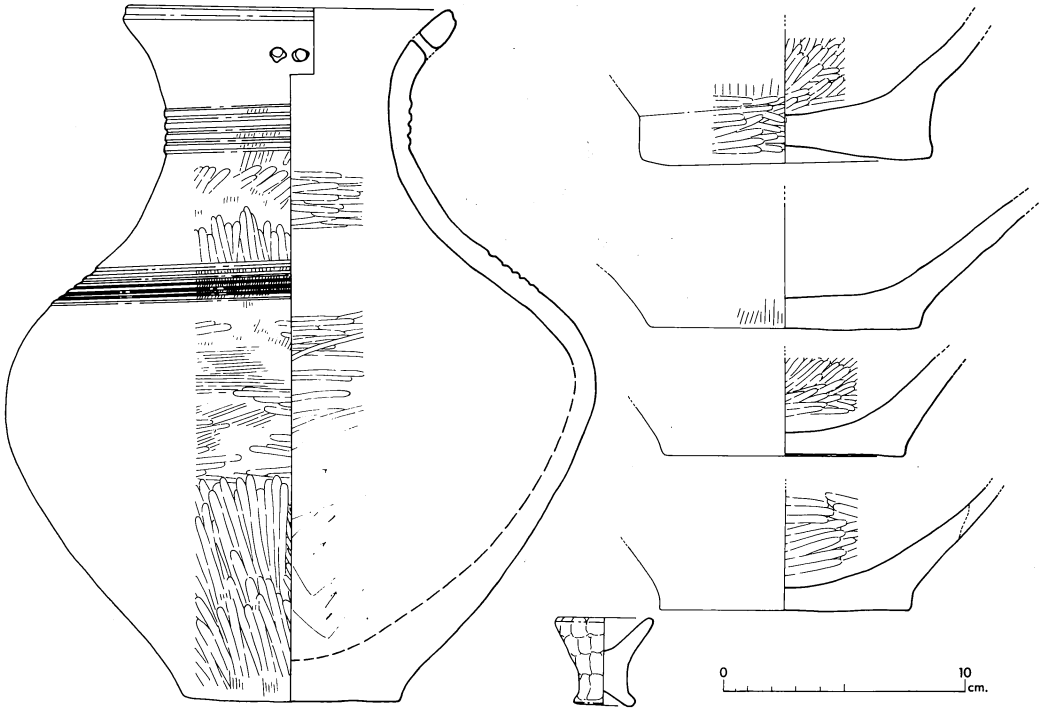
第 6 図　ＳＸ8501木製鍬出土状態



第 7 図　木製鍬実測図

の可能性も考えられるが断定はできない。

吉原B_2地区の出土遺物はコンテナ数で約50杯程度である。そのうちのほとんどが，D－3地区の土坑群から出土した，瓦・染付などの近世・近代遺物である。他にＳＸ8501の黒灰色粘土層より出土した加工木製品も数点ある。詳細は報告書にゆずりたい。



第 8 図　ＳＸ8501出土土器実測図

3．まとめにかえて

中村遺跡で検出された室町時代の掘立柱建物群の延長を考えて調査にはいった。同時代の遺構が確認されなかったことから，中村遺跡の西辺は昨年度調査した範囲で納まることを裏づけた。

また，ＳＸ8501より出土した弥生時代前期の完形の壺，木製鍬の半製品は，調査区の南に広がる沖積平野に弥生時代前期の遺構が広がる可能性を高めたものと考える。

また，少量であるが縄文時代晩期の土器が出土した。土層はＳＸ8501が切り込まれた黄灰色粘質土層（吉原B_2地区の遺構面ベース）の下層の青灰色粘土層である。この層より縄文時代晩期の土器が出土したことは，周辺の平野部の形成時期を考える上で，見逃すことのできない事実である。

矢ノ塚遺跡

1．立地と環境

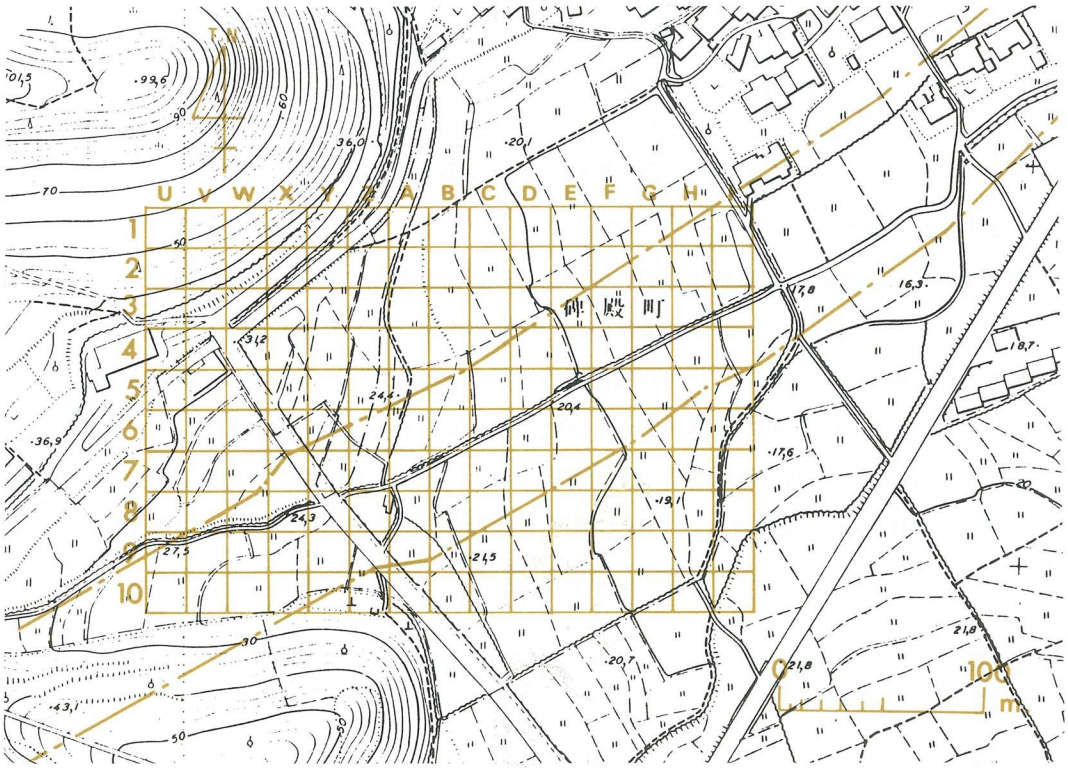
矢ノ塚遺跡は丸亀・善通寺平野の西端，善通寺市吉原町矢ノ塚，碑殿町矢ノ塚に所在し天霧山の南東裾野に営まれている。その標高は19～28mを計り，西から東に向けて下る傾斜地形を呈している。

市道十五丁・三井之江線をはさんで西へ約100m，東へ約200m，南北約60mが調査対象地域である。西側の地区は，南北の丘陵がせまった非常に限定された地形であり，東側の地区は天霧山からの谷筋と南の二反地川の間の狭い台地上に立地する。

矢ノ塚遺跡より東へ向かって広がる平野部は弥生時代の比較的早い時期から開けていたことで知られている。南に近接する我拝師山からは，銅剣・銅鐸が数点出土しており，平野の西辺部にあたるこの地域の弥生時代の特色の一つとなっている。

また横断道の調査で矢ノ塚遺跡の西に隣接する西碑殿遺跡から弥生時代中期後半の可能性の高い方形の柱穴を持つ建物の存在が確認されていることは興味深い。

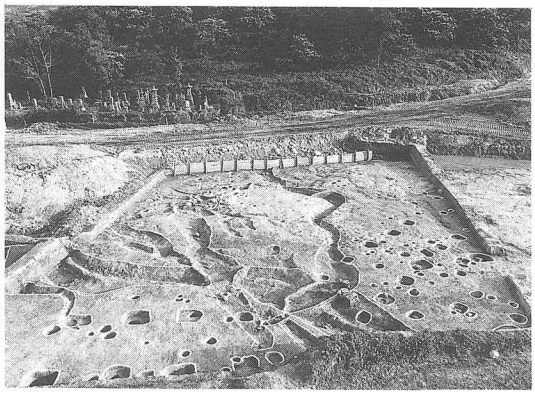
2．調査の概要



第 1 図　矢ノ塚遺跡地区割図

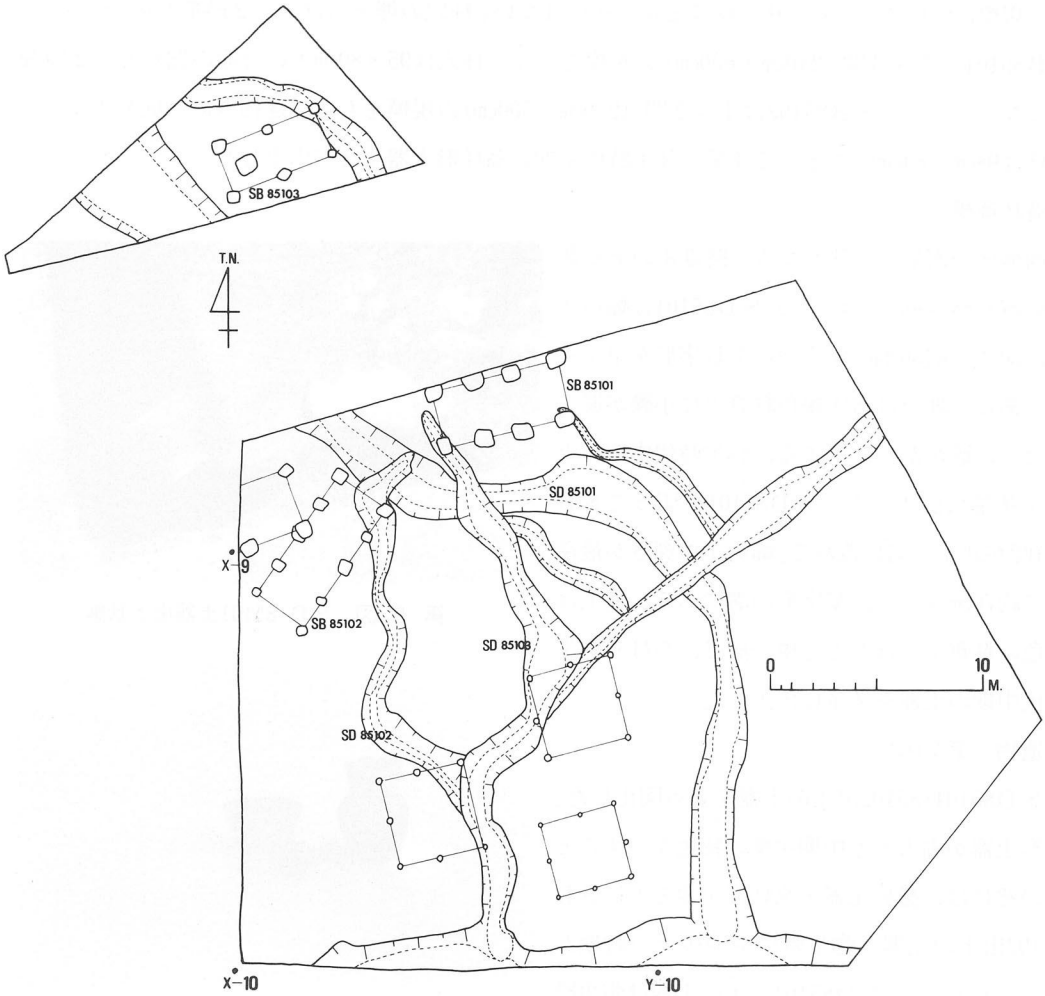
検出した遺構は，建物遺構・溝状遺構・土坑・井戸などであるが，これらは地表下約20～80cmで認められる。各遺構の時期は大別して３時期になる。

弥生時代中期，奈良時代，中世の３時期である。奈良時代の遺構は方形の柱穴を持つ建物（第３図ＳＢ85102）17棟（うち１棟は総柱状をなす）・溝状遺構数本などである。中世の遺構は掘立柱建物17棟，溝状遺構，井戸などがある。建物，溝状遺構（第３図，ＳＤ85103）の主軸方位はほとんどがＮ30°Ｗを表す。



第２図　Ｘ・Ｙ列全景

遺物は，コンテナ数で約400杯になる。ほとんどが弥生時代中期の遺構，包含層に伴なうもので



第３図　Ｘ・Ｙ列遺構配置図

ある。土器の種類は，壺・甕・高杯などの他にミニチュア土器・分銅形土製品・銅剣形土製品など多種におよぶ。弥生時代中期以外の土器としては，須恵器・土師器・瓦器・黒色土器・磁器があるが量は少ない。石器は石鏃・石斧・石庖丁・石槍などが出土している。

以下，弥生時代中期の主な遺構・遺物を西地区・東地区に分けて記述した。

第 4 図　V列全景

(1)　西地区

建物遺構

ＳＢ85101･85103（第３図）が弥生時代中期の建物である。奈良時代のＳＢ85102と比較して柱穴の規模，平面プランの形状にはほとんど違いはない。柱穴の埋土の違いで２時期を区分できる。ＳＢ85101は１×３間（240cm×600cm）の規模をもつ。柱穴は95×80cm大の方形の掘り方で２段掘りになっている。ＳＢ85103は１×２間（210cm×500cm）の規模をもち，建物内に土坑を伴なう。土坑は98cm×84cmの大きさで多量の弥生時代中期の高杯形土器などが出土した。

溝状遺構

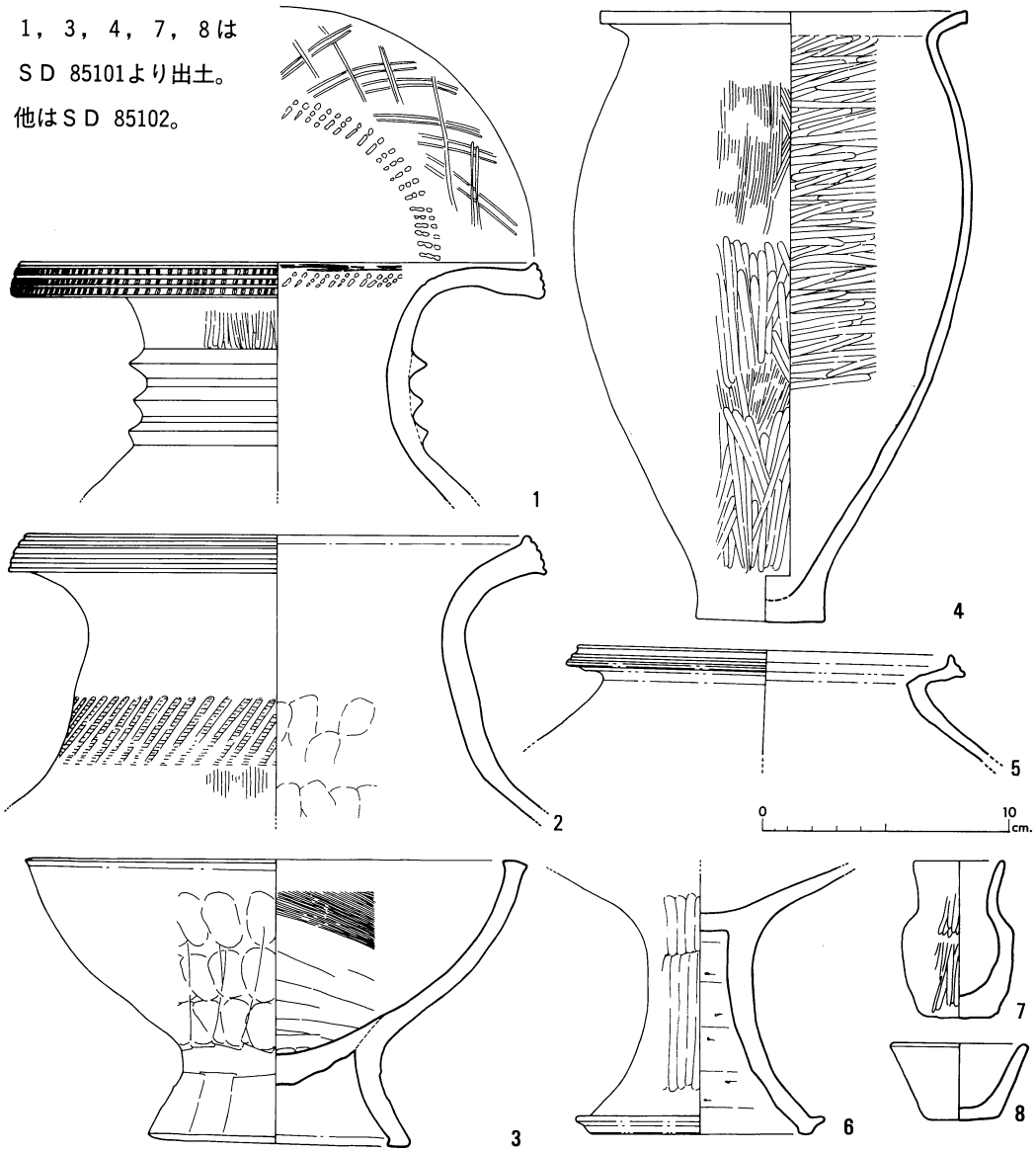
西地区の南端は谷筋となる。時期差のある数本の流れが谷筋に流れこむ。ＳＤ85101は幅約２ｍ，深さが約50cmのゆるやかなＵ字形を呈する溝である。埋土は暗灰褐色粘質土に小礫が混じったり，砂がかったりする。弥生時代中期の土器が多量に出土した。ＳＤ85101を切ってＳＤ85102が北から南に流れる。幅約１ｍ深さが最深部で約70cmを計る，Ｖ字形の溝である。埋土は黒色の粘質土のほとんど単一層で，やはり弥生時代中期の土器を多量に出土した。

第 5 図　ＳＤ 85101土器出土状態

遺物（第７図）

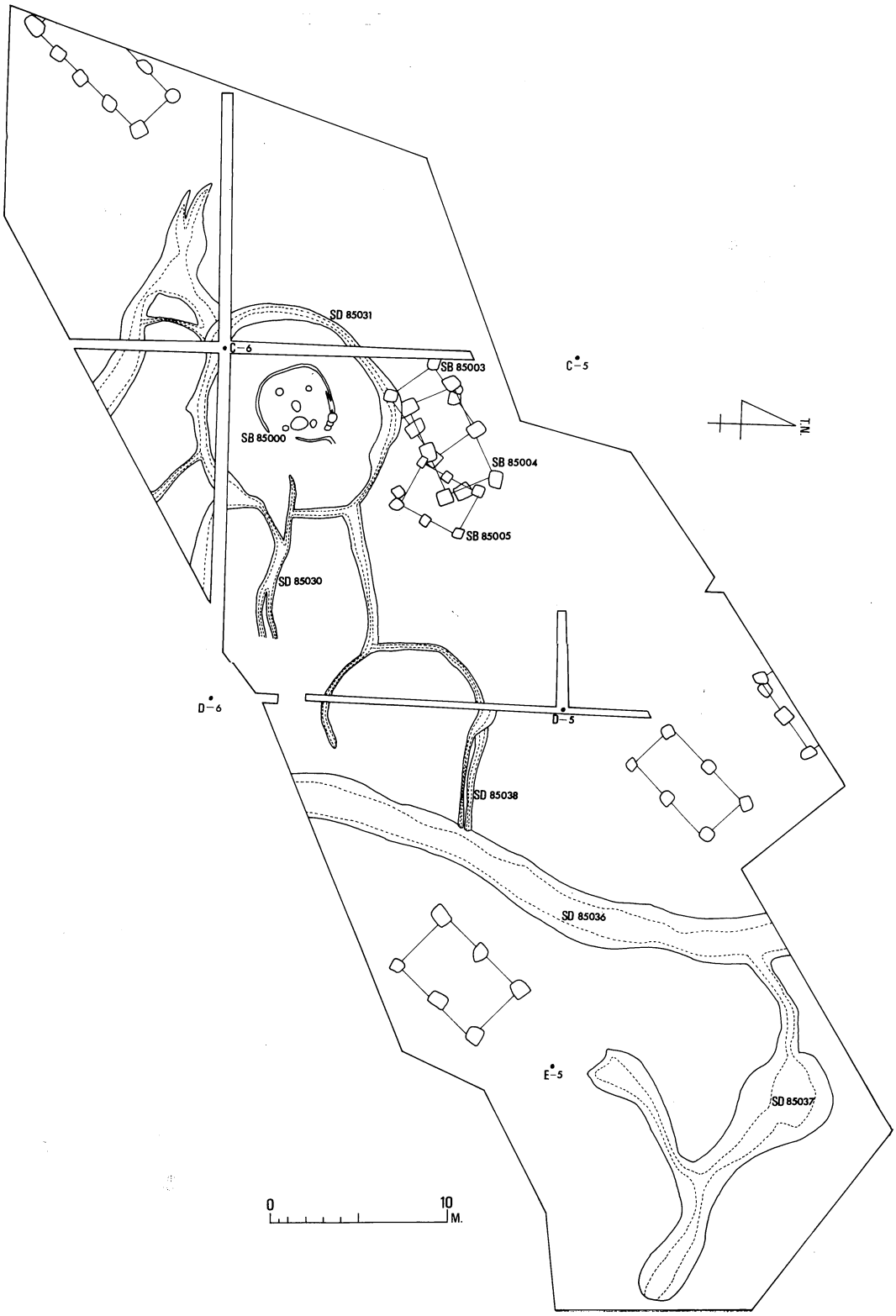
ＳＤ85101･85102出土の土器を８点図化した。壺形土器が両方とも中期中葉の特色を示すことをのぞけば，甕形土器・高杯形土器ともにＳＤ85102出土の土器は弥生時代中期後半の時期が考えられる。またＳＤ85101出土の土器は弥生時代中期中葉の特色をもつ。

第 6 図　ＳＤ 85101出土土器



第 7 図　ＳＤ 85101・ＳＤ 85102出土土器実測図

3・7・8は完形で4は完形に近い。7・8のミニチュア土器はいずれもＳＤ85101出土のもので，ていねいに作られている。ミニチュア土器が出土した場所とほぼ同じ位置から高さ，長さともに4cm程度の水鳥を模したと思われる鳥形の土製品も出土している。遺物の詳細な検討は本報告に譲りたい。



第 8 図　B・C・D列遺構配置図

(2) 東地区

建物遺構

C—6で竪穴式住居を1棟検出した。後世の地下げにより掘り方と床面の一部が削平された状態で検出した。竪穴式住居は5つの柱穴と焼土を持つ土坑，周溝からなる。(第8図，SB85000)規模は，東西約4m，南北約4mで周溝は隅丸方形状をなしている。削平をうけたため周溝の幅は10cm，深さは5cm程度しか残されていなかった。柱穴の規模は30～50cm程度でサイコロの5の目状に位置する。東の2つの柱穴の間に80cm×60cmの土坑があり，埋土の最上層の約3cm幅のみに焼土が確認できた。さらに，周溝とほぼ同心円状に直径約11mの比較的大きな規模の溝（SD85031）がまわる。

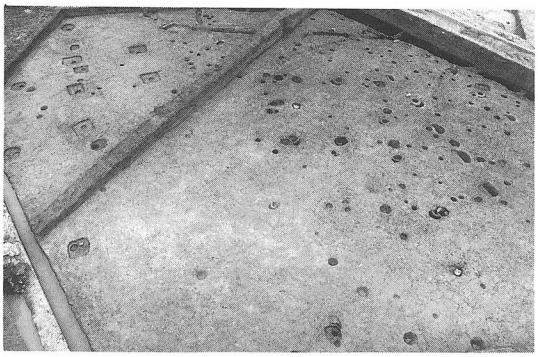
SD85031に切られてSB85003・85004がある。どちらも1間×2間の規模を有し，柱穴の掘り方が方形をなす建物でSB85000より以前に存在したものである。大きさは，やや小さくなるが，SB85005のみが，SB85000と同時に存在した可能性を残す。

さらにD列でも3棟の弥生時代中期の掘立の建物を検出している。柱穴の規模は50～100cmの間で方形の掘り方を持つ。

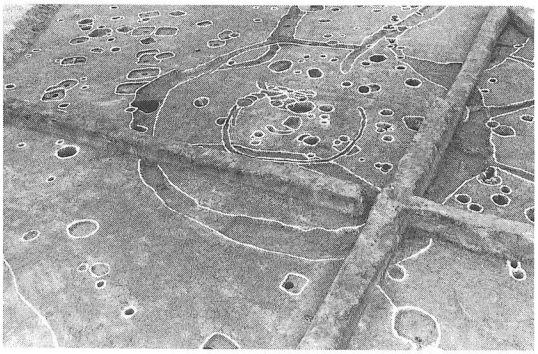
溝状遺構

竪穴式住居をまわるSD85031から派生するように，数本の細溝が放射状に周辺にのびている。

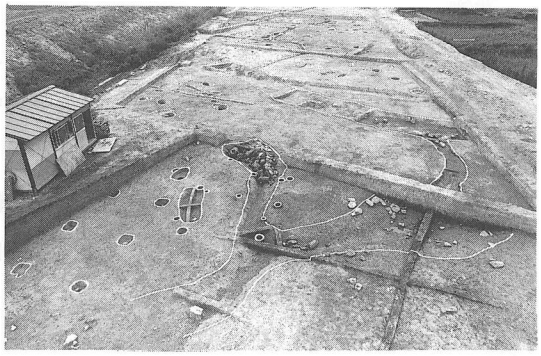
SD85030はSB85000から出て，SD85031に合流する。SD85031から分流する溝はSD85038となりD－5中央付近でSD85036に合流する。他の溝と比較してSD85036は規模が大きい。



第 9 図　Z・Y－6・7全景



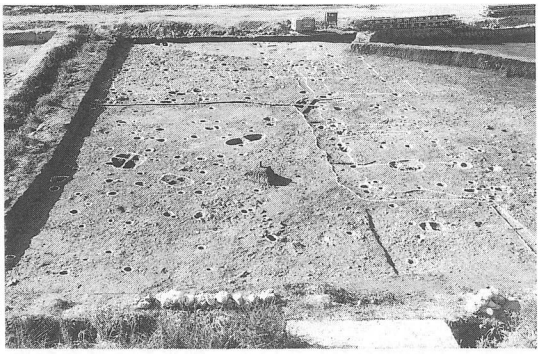
第 10 図　竪穴住居周辺



第 11 図　B・C・D列全景

第 12 図　SD 85036土器出土状態

ＳＤ85036は幅，約3.8m深さは削平をうけた可能性が高いが，最深部で約50cmになる。他の細溝の埋土が暗灰褐色粘質土の単一層であるのに対してＳＤ85036は上層の黒色粘質土と下層の暗灰褐色粘質土に分けることができる。黒色粘質土から多量の弥生時代中期の土器が出土する。



第 13 図　中世掘立柱建物群

ＳＤ85037はＳＤ85036から分流し，Ｅ－５北側で円形にふくらみをもつ。さらに東へ流れをもち，Ｅ－５の中央より南東の方向で消滅する。埋土は黒色粘質土に礫が混じったり，砂がかったりする程度で単一層である。

ＳＤ85037が消滅する場所より東では，中世の遺物・遺構のみが検出されるので，弥生時代中期の遺構の広がりは，おおむねＳＤ85036が境界になっていると考えられる。

第 14 図　銅剣形土製品

遺物

第15図は，ＳＤ85036の黒色粘質土層より出土したものである。５点図化した。弥生時代中期中葉から後半の特色を持つ土器である。現在整理中で遺物の詳細と検討は，東地区と同様に本報告でおこないたい。

実測図はのせられなかったが，注目すべき遺物として銅剣形土製品がある。出土地点はＳＤ85037が円形に広がる場所で，流れに直交する方向に石が置かれ何らかの人為的な活動が想像される。ここでは，銅剣形土製品以外にミニチュア土器，分銅形土製品などの祭祀遺物が出土している。

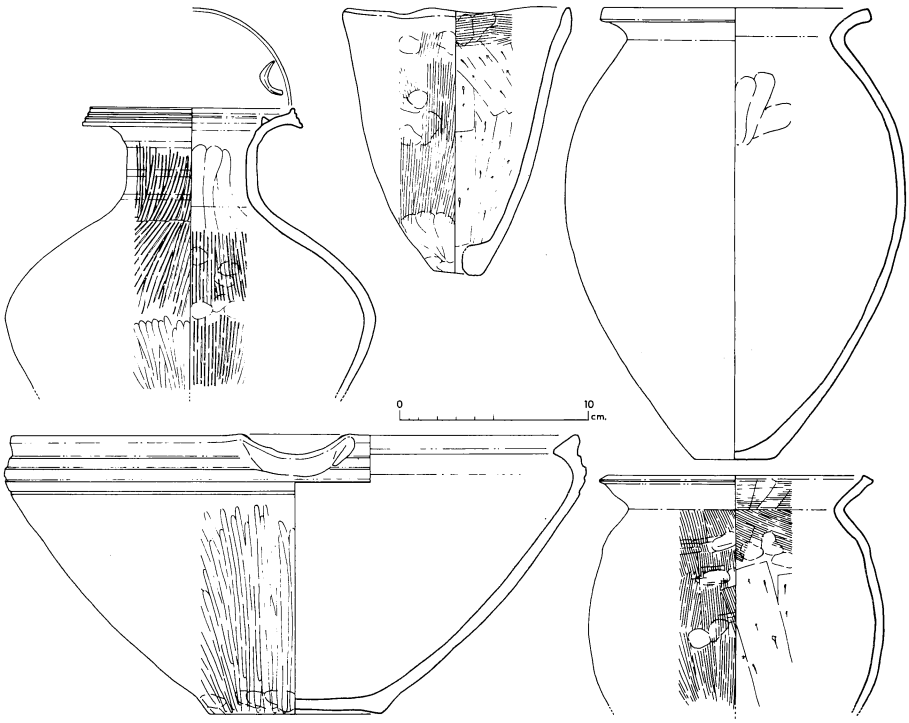
銅剣形土製品は，写真（第14図）で見るとうり真ん中で折れているもののほぼ完形に復原できる。長さ約13.5cm，幅約３cm，厚さ約３cmである。鋒，樋，茎などを表現し，関を表わしていると考えられる所には２つの孔が作られている。調査区の南に近接する我拝師山で出土した平形銅剣を模したものではなく，細形銅剣か中細形銅剣を模したものと考えられる。細形銅剣の土製品であるとしたら，周辺地域に出土例がないだけに非常に興味深い資料となろう。

３．まとめにかえて

約10ヶ月におよぶ矢ノ塚遺跡の調査を終えた。その結果はおおむね次のように要約できる。

○　弥生時代中期の方形の掘り方の柱穴を持つ建物を12棟検出した。

○　Ｅ列の線（ＳＤ85036の流れる方向）で弥生時代中期の遺構は消滅する。



第 15 図　ＳＤ 85036出土土器実測図

○　鳥形土製品，銅剣形土製品，分銅形土製品，ミニチュア土器などの祭祀遺物が多く出土した。

○　金蔵寺下所遺跡，稲木遺跡Ｂ地区で確認された方形の掘り方の柱穴を持つ奈良時代の建物群とほぼ同時期になる可能性の強い建物を17棟検出した。

○　中世の建物，溝状遺構，土坑などの主軸方位はほとんどがＮ30°Ｗとなる。

以上が調査区での成果である。また，Ｂ列の調査区北辺に隣接する場所で善通寺市が約300m²の調査を実施した。弥生時代中期の竪穴式住居１棟，方形の掘り方を持つ弥生時代中期の建物（１×１間，柱穴の大きさは約120cm×120cm）１棟などを検出した。このことからＳＤ85036から西端のＵ列にかけて弥生時代中期の遺構が天霧山の山裾に向かって広がる可能性を強くした。

西碑殿遺跡

西碑殿遺跡は，弥谷山の西南麓丘陵上に立地し，尾根を挟んだ北東側に矢ノ塚遺跡が所在する。

調査は，昭和59年度からの継続となり，主としてF地区について実施した。なお，E地区－F地区間は未買収地になっており，昭和61年度に調査実施の予定である。

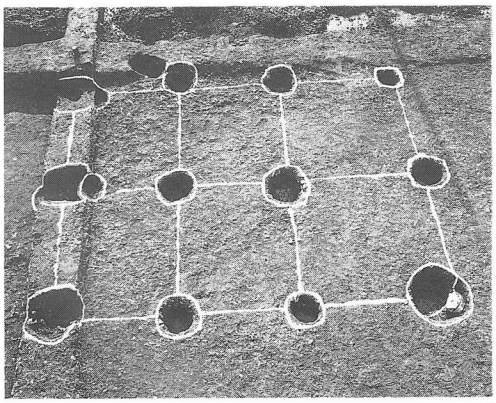
本遺跡で検出された遺構は，掘立柱建物跡が主で，柱穴掘り方が方形を呈するか円形かで区分することができる。この形態差は時期差としてとらえられ，円形を呈するものは中世に属すると推定されるが，出土遺物が少なく断定には至っていない。

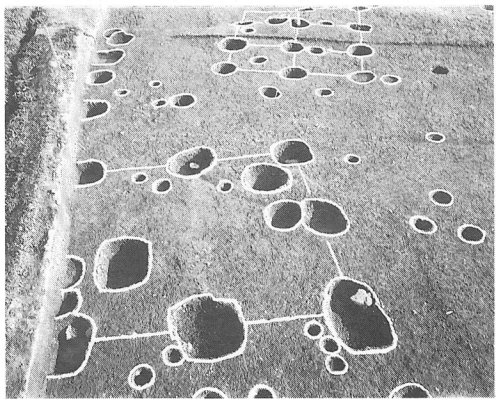
方形を呈するものは，奈良時代前後の所産であろうと推定していたが，①隣接する矢ノ塚遺跡では，弥生時代中期の方形の掘り方を持つ掘立柱建物跡が確認されている。②本遺跡の掘立柱建物跡の掘り方埋土中に，弥生土器以外を含まないものがある。③昨年度末の段階では方形土坑と考えていた一辺1.2mの掘り方を持つ掘立柱建物跡（１×１間）の掘り方底から，ほぼ完形に近い弥生土器が確認されている。

以上のことから，方形の掘り方を持つ掘立柱建物の多くは弥生時代に属するものと推定できるが，包含層出土遺物中に奈良時代の須恵器が確認されていることもあり，一部奈良時代の遺構の存在も想定される。

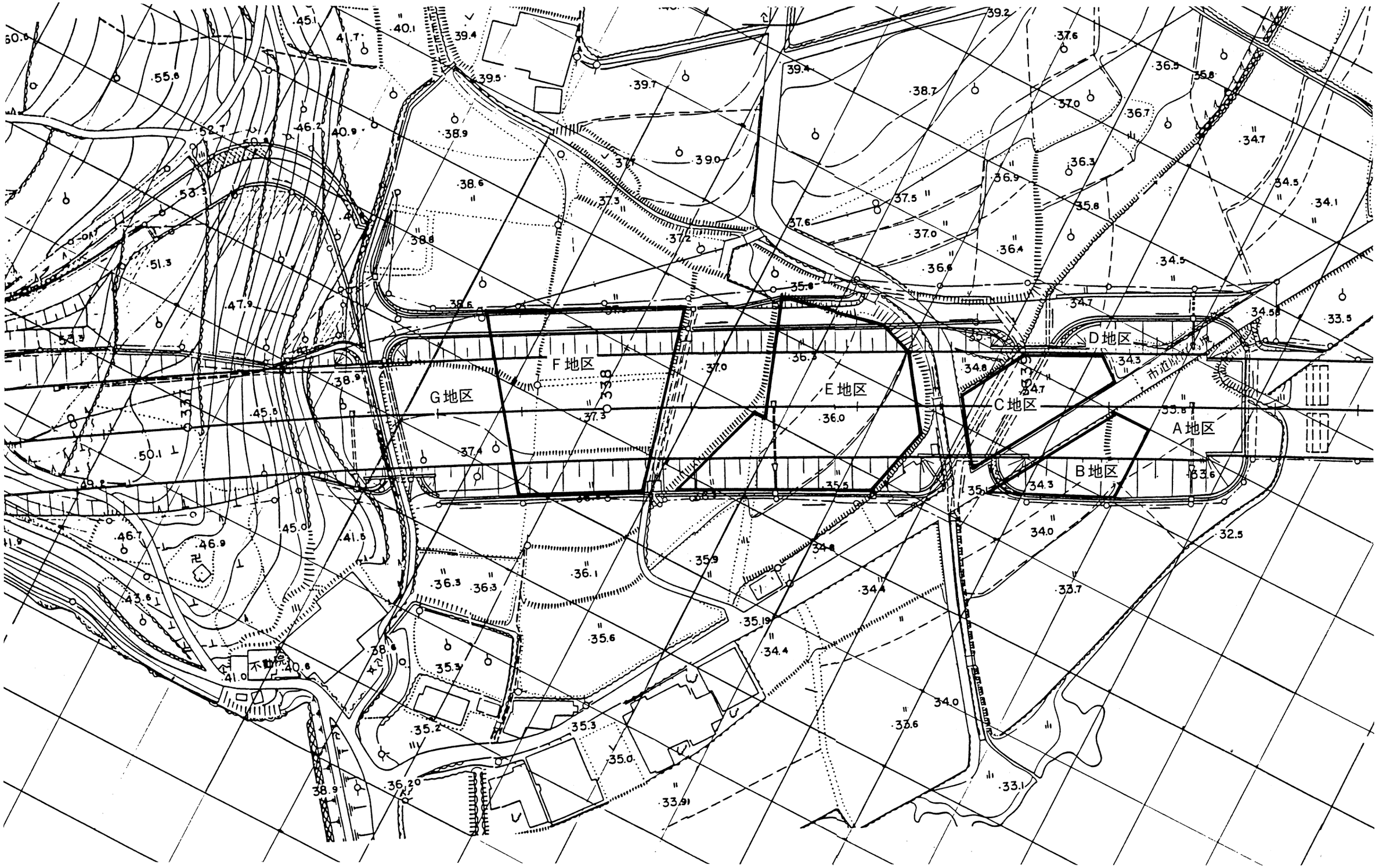
細かな時期区分は，未買収地の調査を含めて今後の検討を待ちたい。

このように西碑殿遺跡は，時期・構造ともに矢ノ塚遺跡に類似する内容を持ち，両遺跡間に有機的な関係を想定することができる。これは，弥生時代においては集落立地及び領域の問題があり，古代においては南海道との関連も考えられ，今後の研究において重要な位置をしめると言えよう。

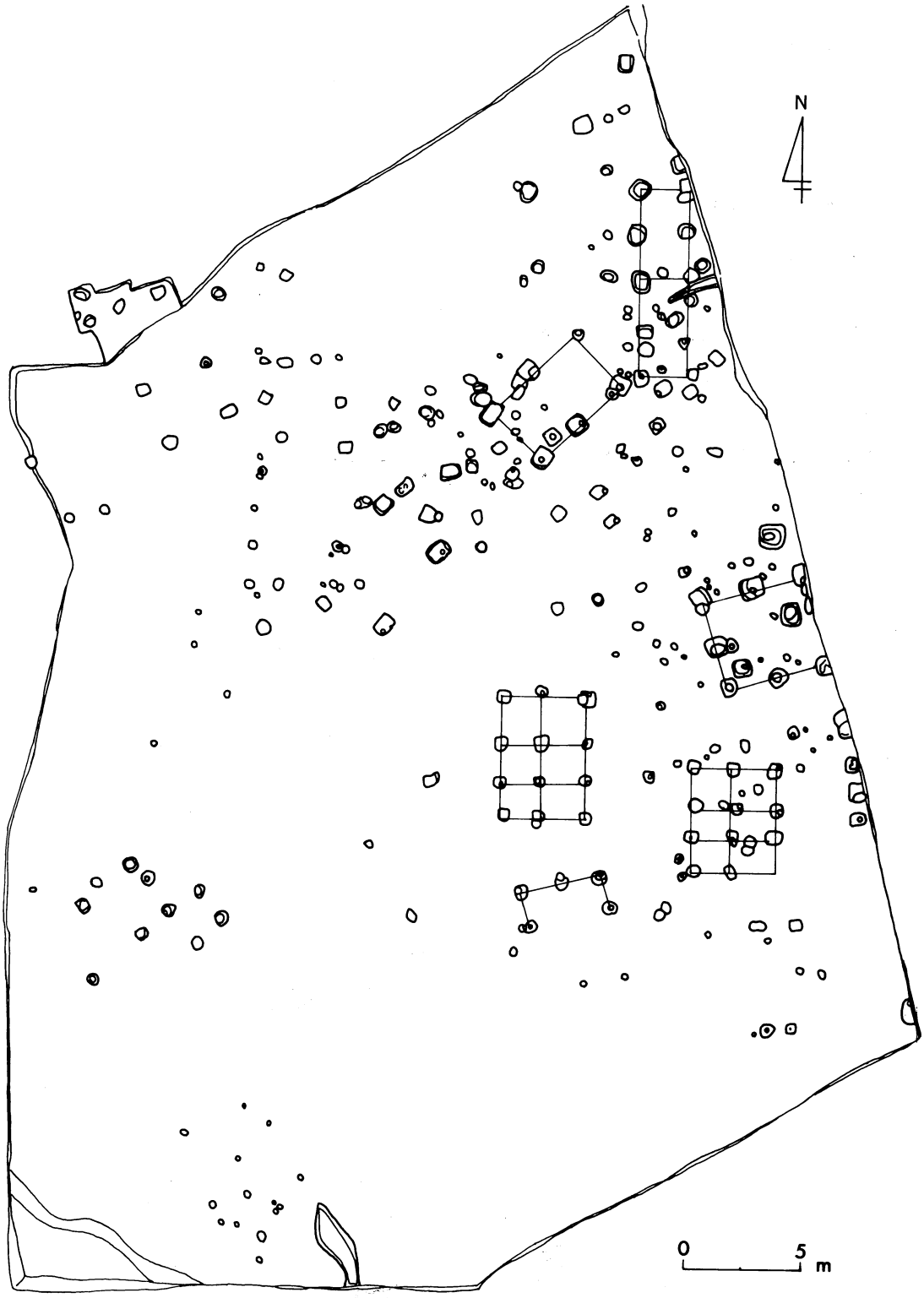




第 1 図



第 2 図 西碑殿遺跡地区割図



第 3 図　F地区遺構平面図

利生寺遺跡　Ⅰ・Ⅱ区

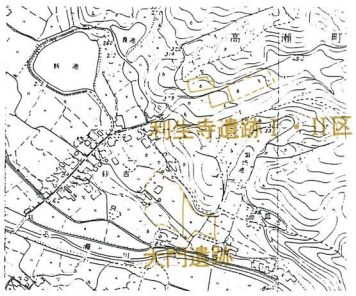
立地と環境

遺跡は，鬼ヶ臼山の裾部で西方に開口する谷地に立地する。その谷の底部で，もっとも広くなっている部分がⅠ区である。標高約36m，水に洗われた荒い花崗土を基盤とする。

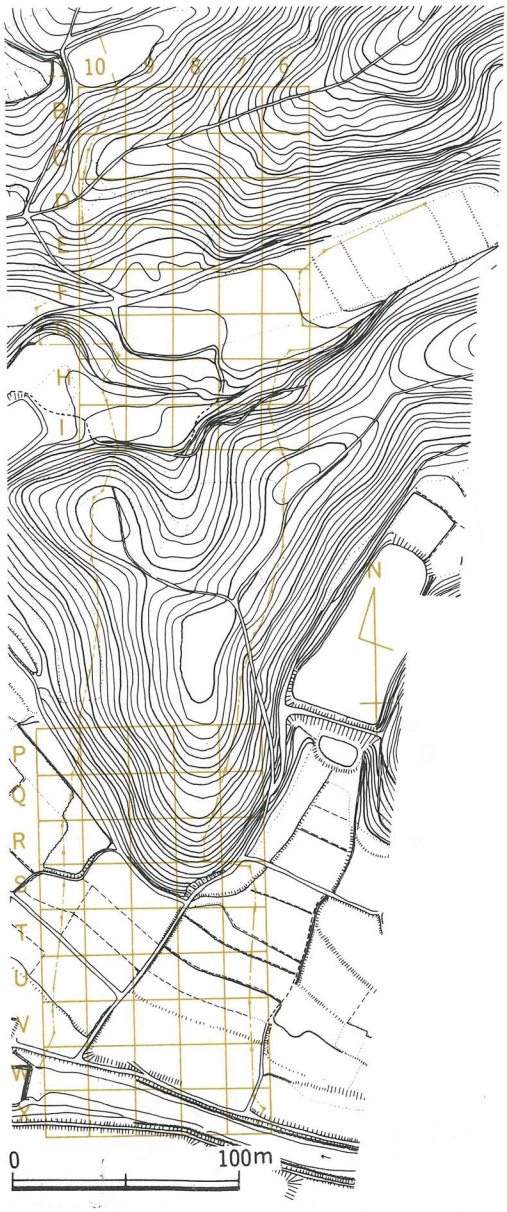
この付近には，「利生寺」という小地名が残されている。谷の最奥部では，骨蔵器が発見されている。

谷の北側斜面部に，わずかにあるテラス状の平坦地がⅡ区である。標高約39m，褐色粘質土（花崗土）を基盤とする。

この付近には，最近まで，石製五輪塔が散在していた。



第 1 図　調査地区と遺跡の広がり
（実線）　（破線）



第 2 図　利生寺遺跡・大門グリッド配置図

遺構

Ⅰ区は，用地買収前，そこに生えていた竹などを重機で除去し，さらにそれを同所に埋める，という工事が行なわれた。その結果，調査区全域にわたって，径２～５ｍ，深さ２～４ｍの攪乱坑が掘られたために，遺構の残存状態は極めて悪い。

Ⅰ区からの検出遺構

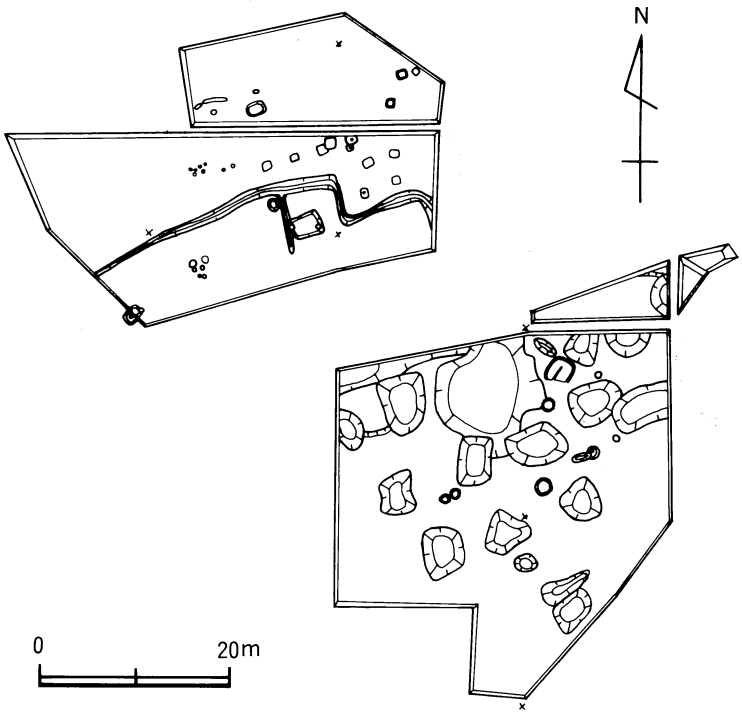
弥生時代の竪穴遺構	1
江戸時代の掘立柱建物跡	1
井戸	1
土坑	8

当初，予想されていた中世寺院跡があるとすれば，ここよりも，もっと奥部にあると思われる。そこには，現在，郭状の平坦地がある。

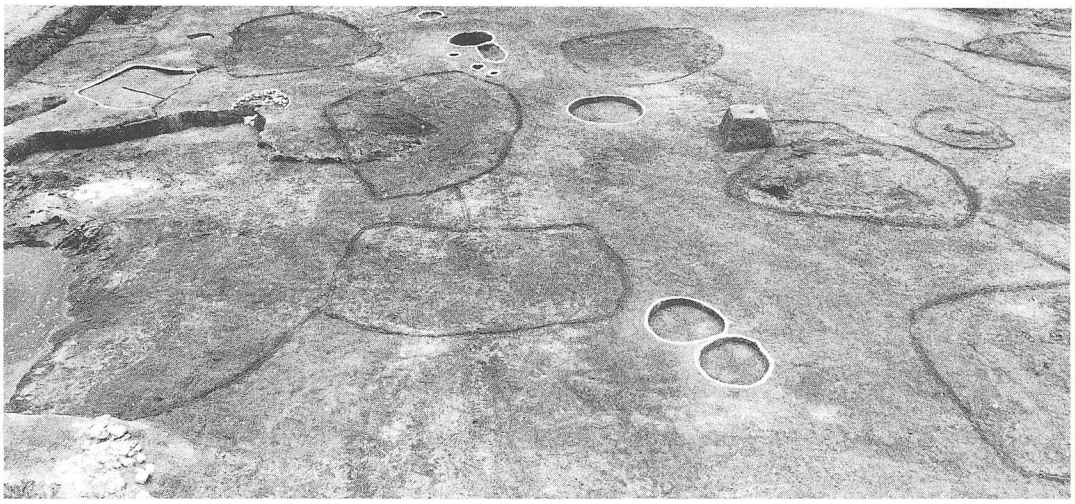
Ⅱ区からの検出遺構

弥生時代の土坑	2
室町時代の竪穴住居跡	1
円形・方形のピット	多数

竪穴住居跡は，３×2.7ｍの規模で，竪穴内には円形の土坑が掘られていた。



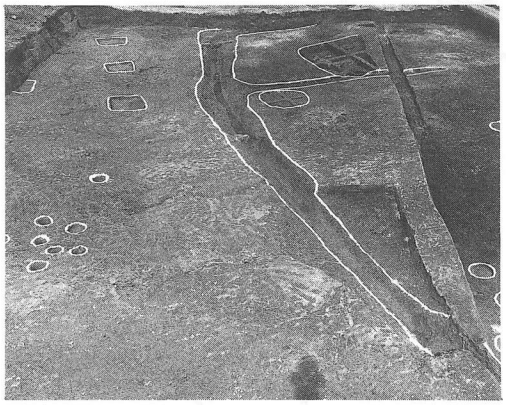
第３図　利生寺遺跡Ⅰ・Ⅱ区遺構配置図



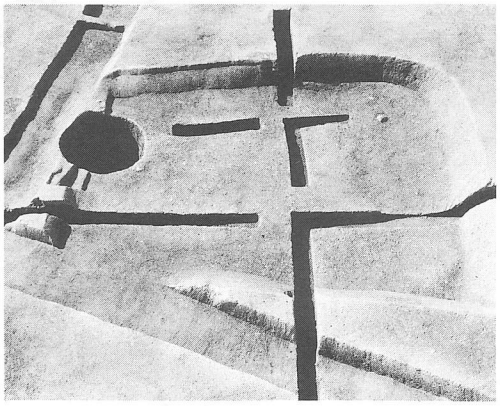
第 4 図　利生寺遺跡 I 区

第 5 図　井戸

第 6 図　井戸の発掘



第 7 図　利生寺遺跡 II 区

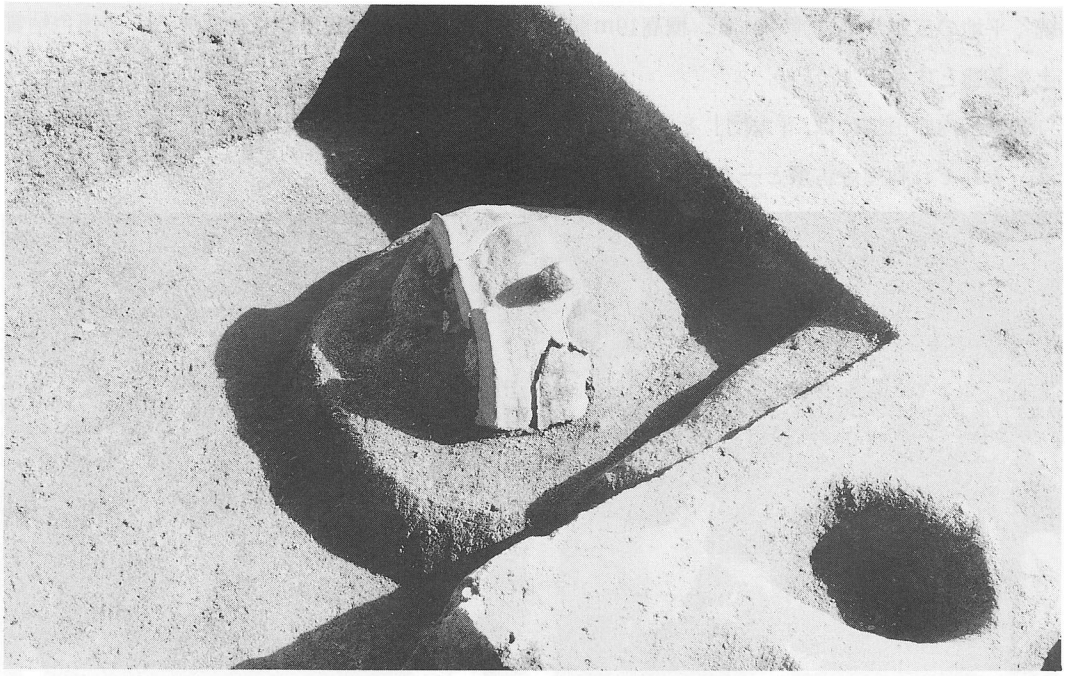


第 8 図　竪穴住居跡

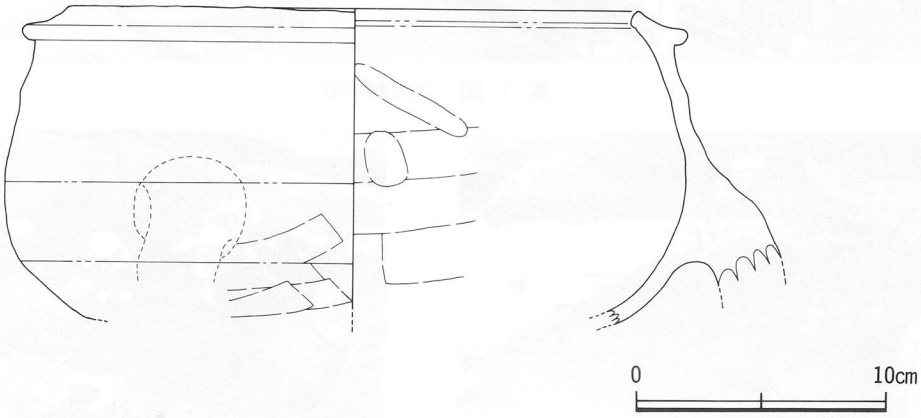
遺物

Ⅰ区の竪穴遺構からは，弥生土器の小片が，井戸・土坑からは，江戸時代と考えられる染付椀等が出土した。包含層からは，中世の土器や銅銭（「永楽通宝」等）が出土している。これは，当区よりも高所からの流れ込みと思われる。

Ⅱ区の土坑からは，弥生時代後期の弥生土器が出土した。竪穴住居跡の床面から土鍋が出土した。



第 9 図　土鍋出土状況



第 10 図　土鍋実測図

大門遺跡（利生寺遺跡Ⅲ区）

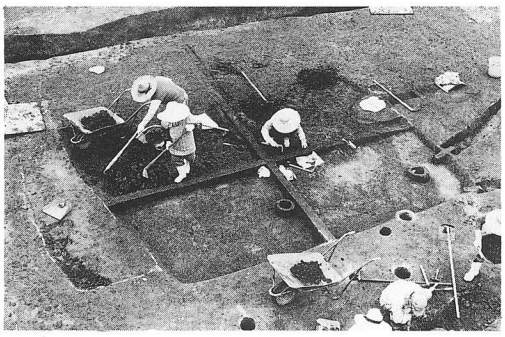
立地と環境

鬼ヶ臼山から派生する一尾根が終って，高瀬川に至る間の巾約70mの狭小な平地に立地する。北は山で，南は西流する川で，東は幾条もの尾根で遮られている。一方，西には，瀬戸内海まで続く平地の広がりが見渡される。標高19m前後，北東から南西へ緩やかに傾斜する。淡褐色粘質土を基盤とする。

調査区内の田畑には，「大門」という小地名が残っている。また，調査区の北・東方の尾根上には，それぞれ利生寺古墳と一本松古墳がある。

第 1 図　現地説明会

第 2 図　重機による表土はぎ



第 3 図　竪穴住居跡の発掘

遺構

遺構は，古墳時代後期のものと，室町時代のものが遺構面を別にしてある。

古墳時代後期の遺構

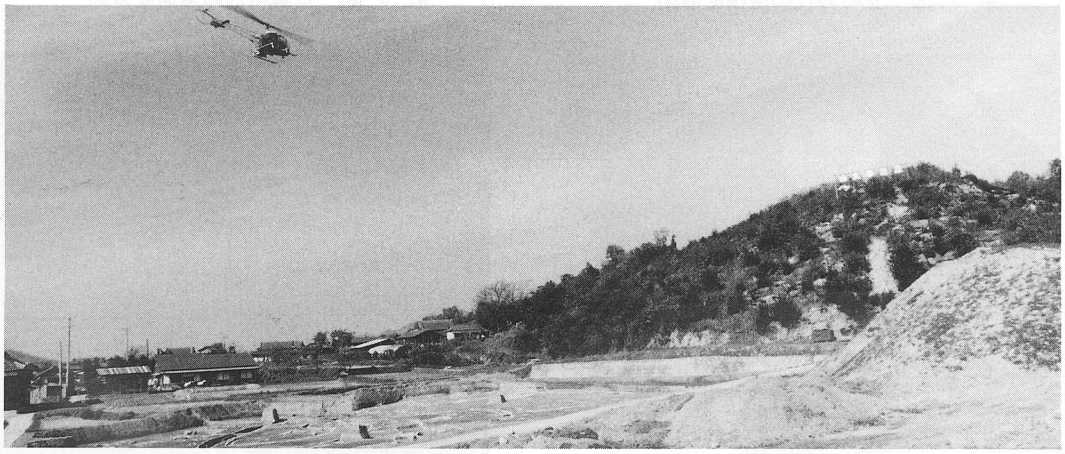
竪穴住居跡	15
掘立柱建物跡	1
土坑	7
溝状遺構	多数

15棟の竪穴住居跡のうち8棟は，カマドと煙道をもっている。煙道は，長いものが多く，1.5mのものもある。土坑のなかには，床面が平坦で，土坑内に1及至4のピットをもつものがある。これは，作業小屋などとしての用途が推測される。溝状遺構は，それ単独で機能しているものと，竪穴住居に付属すると思われるものがある。前者のなかには，集落内を真直に貫通しているものもある。後者は，竪穴住居からの排水の機能などが考えられる。

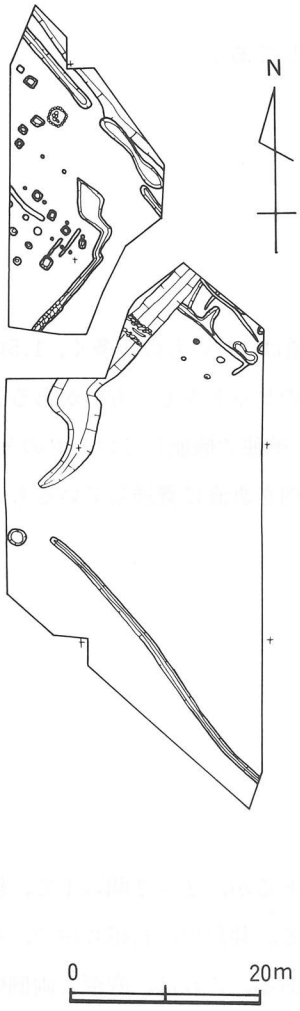
室町時代の遺構

掘立柱建物跡	3
礎石建物跡	1
土坑	多数
井戸	1
溝状遺構	多数

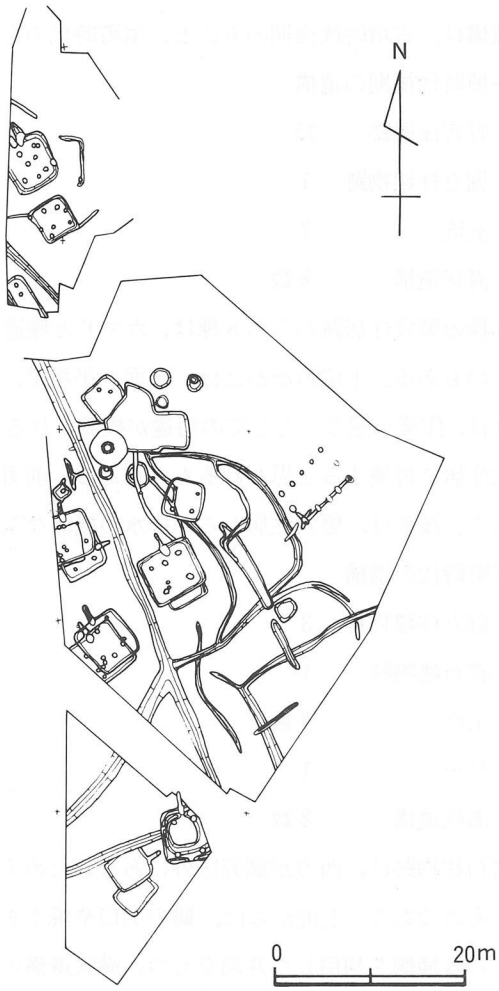
礎石建物跡は，西方が調査区外にあたるため全体の規模は不明であるが，2×2間以上で，総柱のものである。土坑からは，鞴の羽口や焼土を出土するものがある。井戸は，石組井戸で，石組下には桶側を利用した井筒をもつ。溝状遺構のうち石組溝が1本ある。これは，底部と両側壁に石を使用したもので，内巾は30cmである。また溝内に堰状の石組遺構をもつものもある。



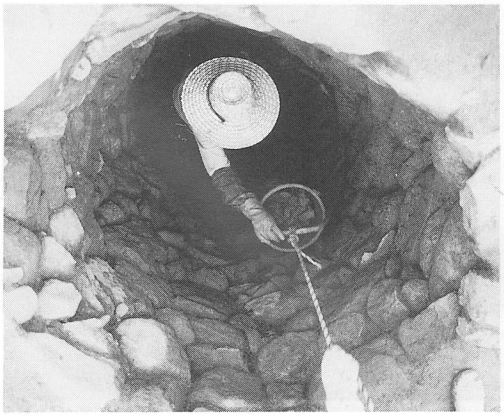
第 4 図　ヘリコプターによる航空測量



第 5 図　室町時代の遺構配置図

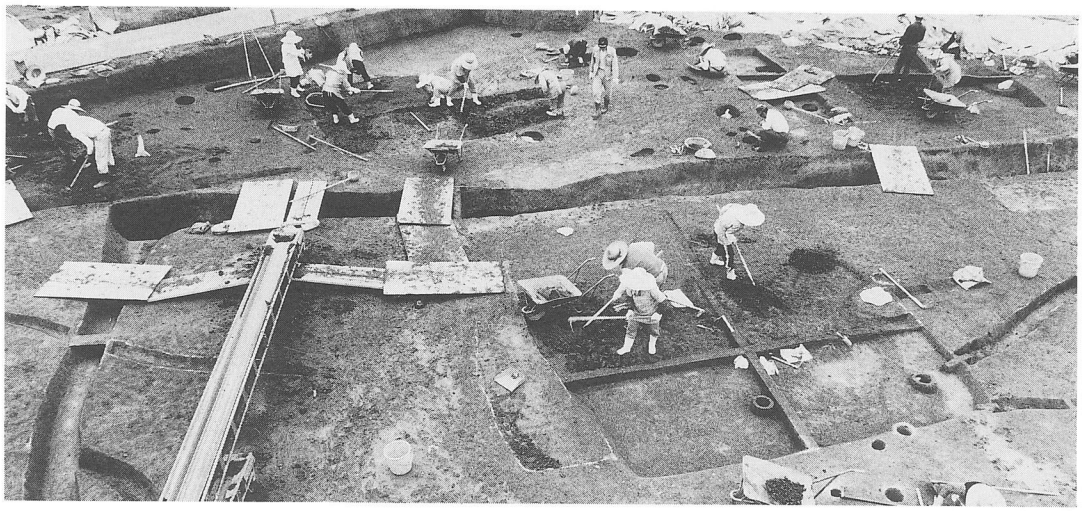


第 6 図　古墳時代の遺構配置図

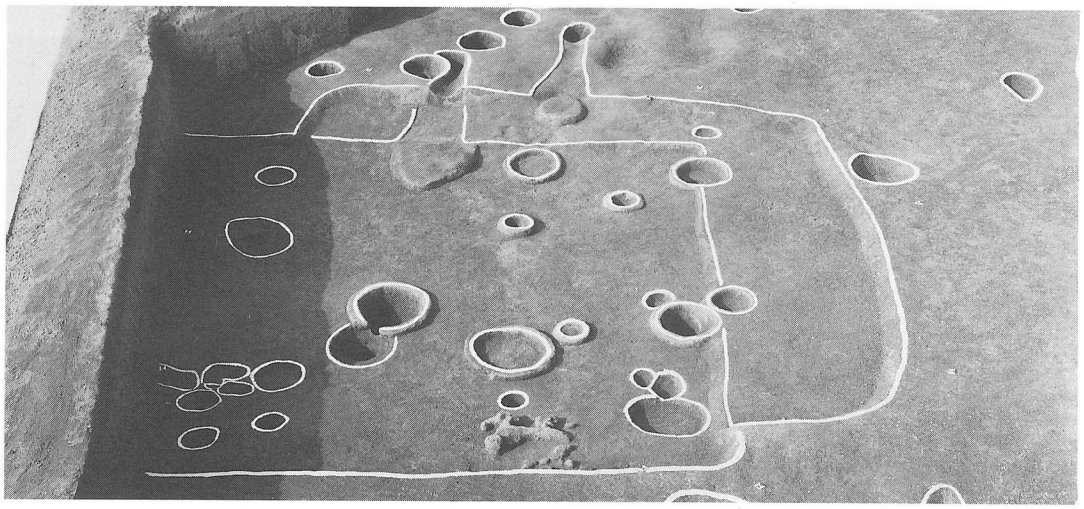


第 7 図　井戸の発掘

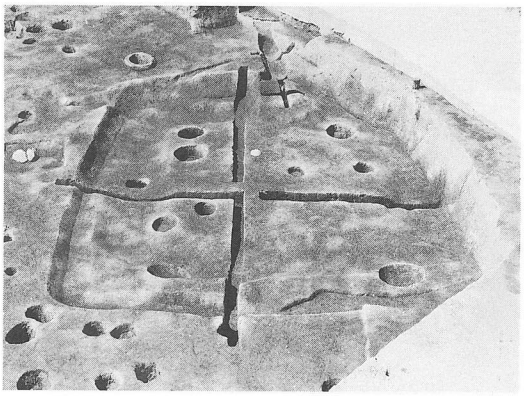
第 8 図　古墳時代後期の遺構



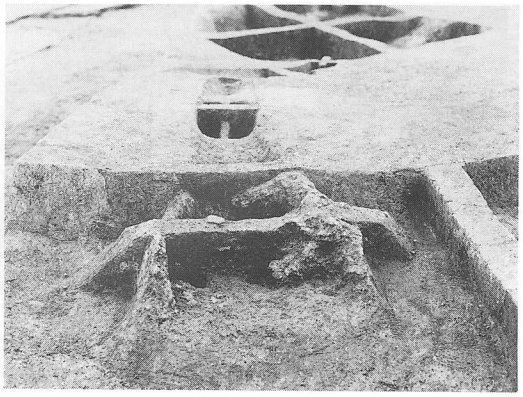
第 9 図　発掘作業



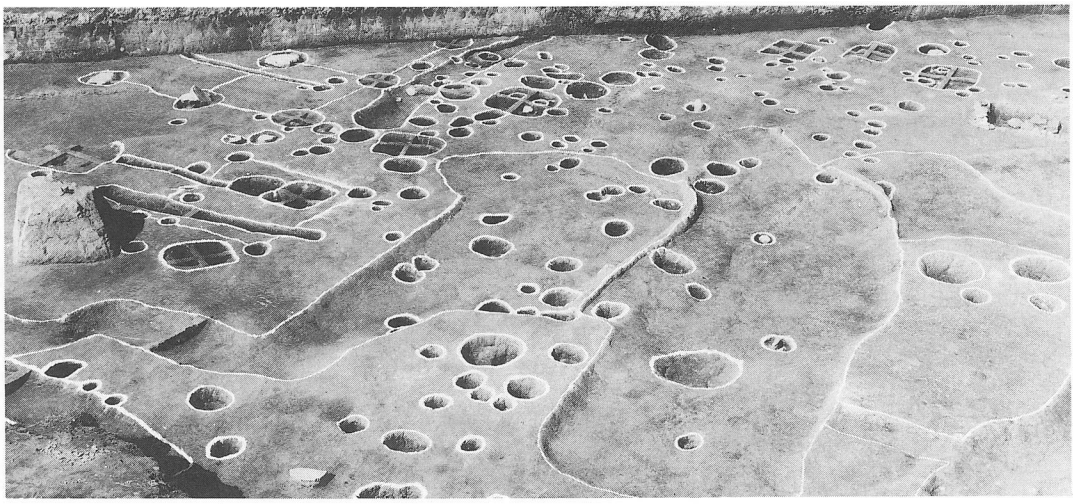
第 10 図　切り合う竪穴住居跡



第 11 図　竪穴住居跡



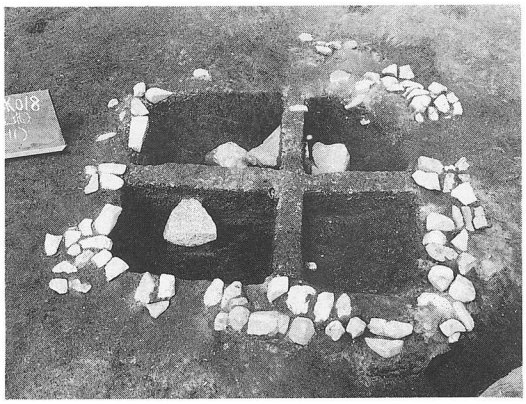
第 12 図　カマドと煙道



第 13 図　室町時代の遺構

第 14 図　石組溝

第 15 図　堰状の石組



第 16 図　石で囲まれた土坑

遺物

古墳時代後期の遺物

溝状遺構と竪穴住居跡から主に出土している。

須恵器（坏・高坏・短頸壺・台付長頸壺・甕・甑・台付鉢）

土師器（壺・甕・鞴の羽口）

鉄滓

獣骨

鞴の羽口と鉄滓は，特定の竪穴住居跡から出土した。

室町時代の遺物

各遺構と包含層から多量に出土した。

土師質土器（椀・坏・小皿・土鍋・鞴の羽口等）

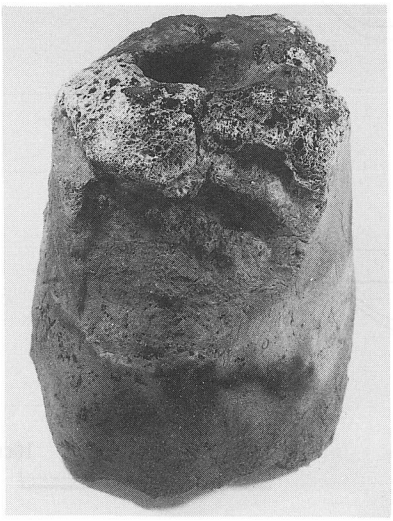
瓦質土器（火鉢）

備前焼（甕・擂鉢）

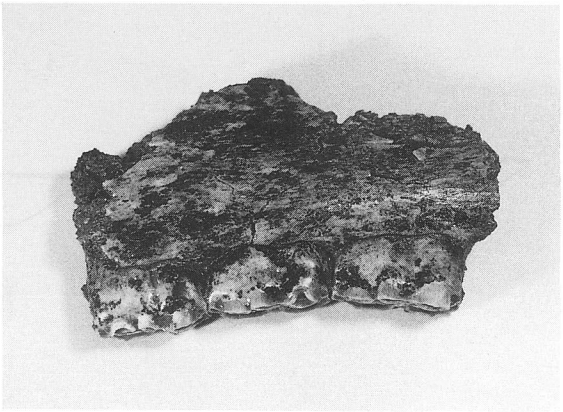
青磁（碗等）

鉄製の鋤先

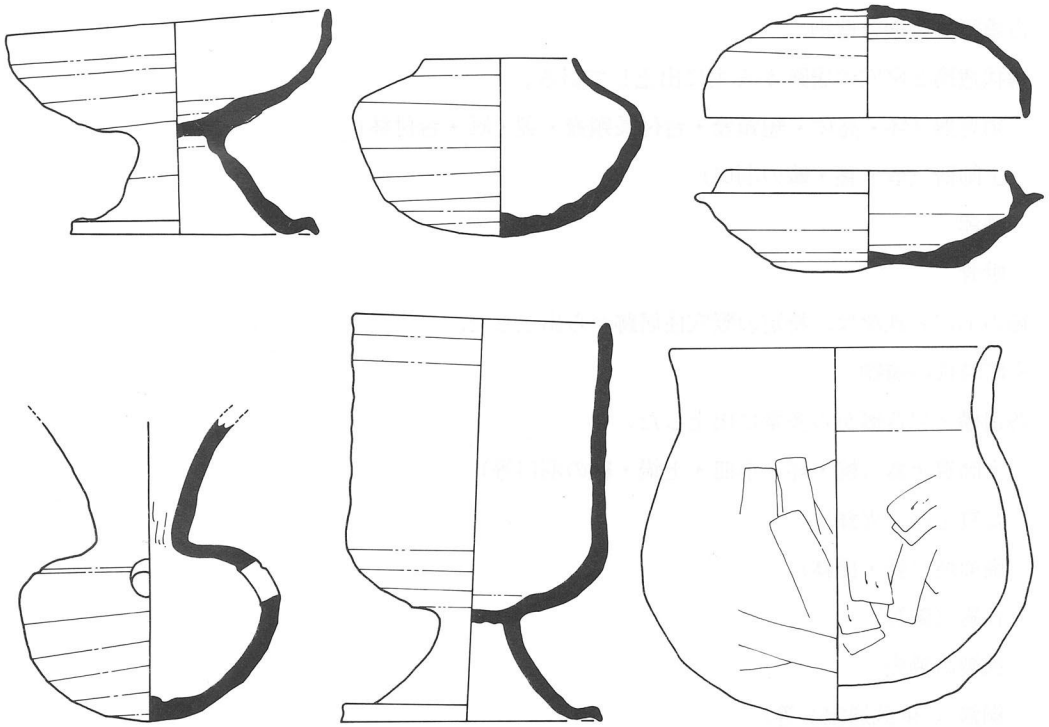
銅銭（「供武通宝」等）



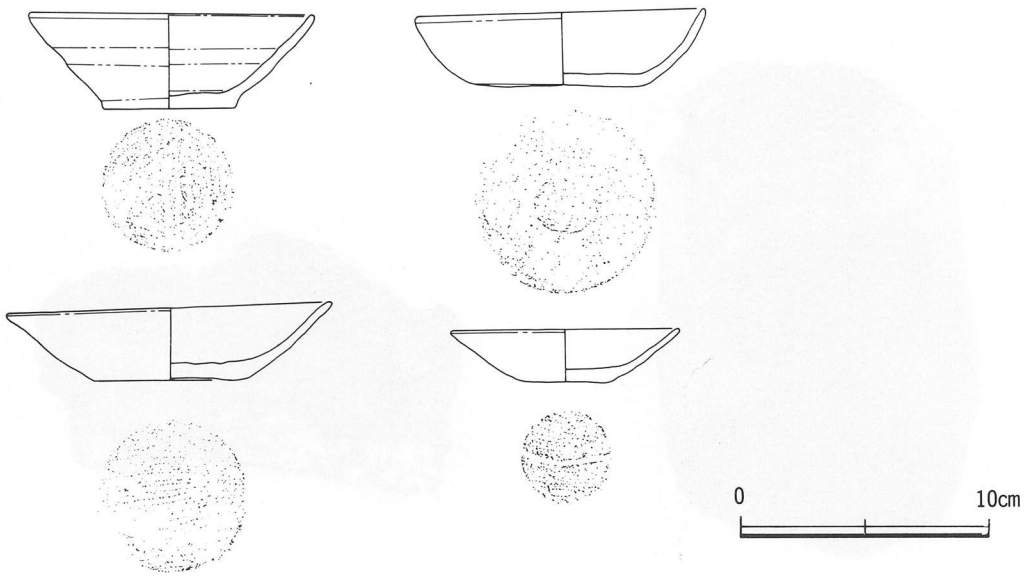
第 17 図　鞴の羽口



第 18 図　動物の歯



第 19 図　古墳時代の須恵器と土師器



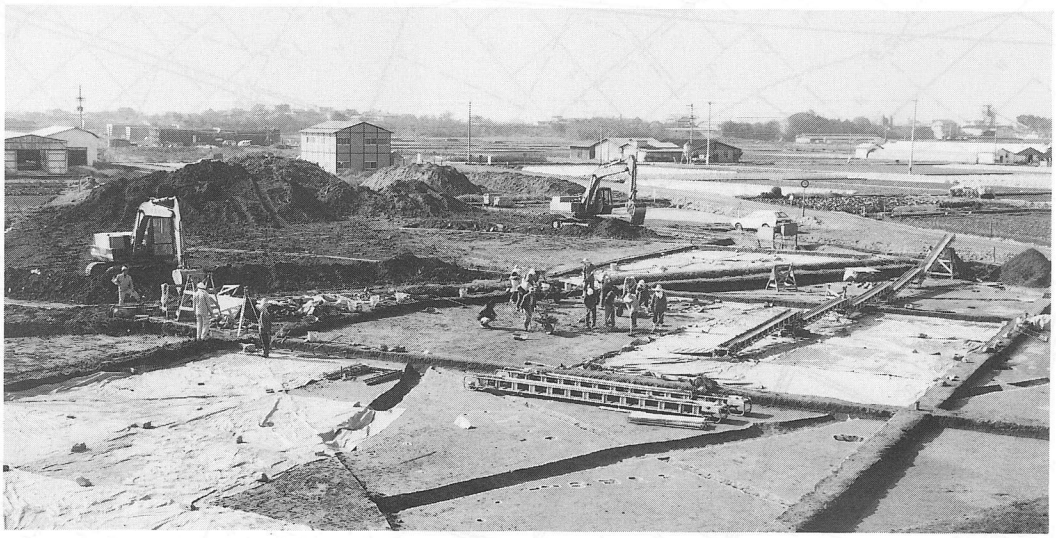
第 20 図　室町時代の土師質土器

刈田郡条里

1．調査の概要

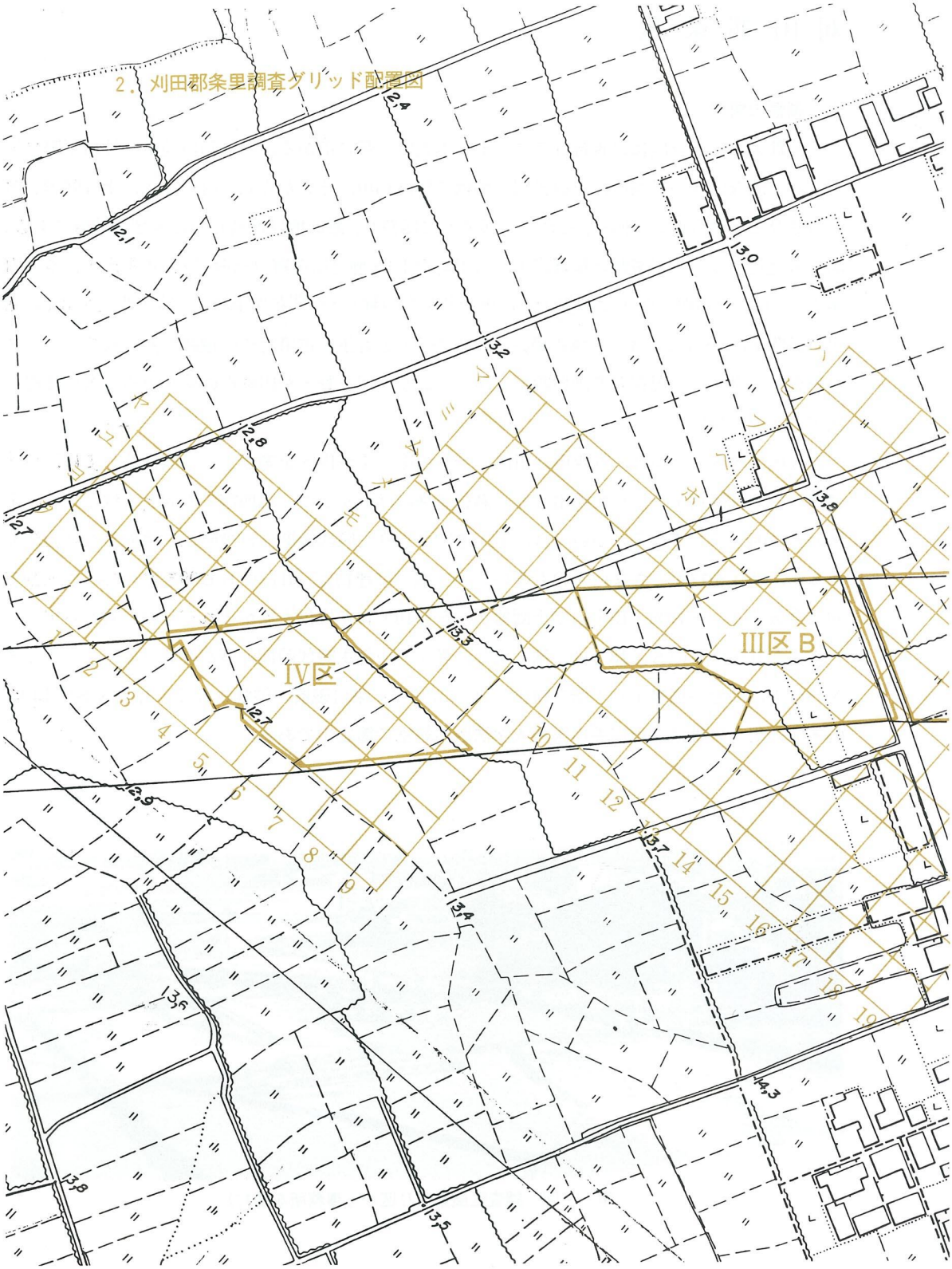
刈田郡条里の調査区は，観音寺市古川町・本大町一帯に広がる，標高14m前後の沖積平野に位置する。調査区内の最高所は市道吉岡江藤線で標高15m，そこから北は財田川へ，南は阿讃山脈から延びる洪積台地の方向へ，それぞれ緩やかに傾斜し，最低地は標高12mの洪積台地麓である。調査区近辺では，古川遺跡（銅鐸出土，古川町南下）・樋之口遺跡（石庖丁・石斧等出土，本大町本大）・石の経遺跡（弥生土器等出土，中田井町石の経）・谷間が原遺跡（土器・砥石等出土，古川町谷間が原）・みこし塚（平塚古墳，古川町香門）と弥生～古墳時代の遺跡が知られている。また調査区一帯には，現在も方画地割が遺存しており，旧三野・刈田両郡の境を市道吉岡江藤線に比定する説も強い。

調査区は6区に分かれ，本年度はIII区の一部を除くI～IV区を調査した。遺構としては，溝状遺構と掘立柱建物を主として検出した。溝状遺構のほとんどは，現地割の方向と一致しない。I区のSD04をはじめ数条については，出土遺物から弥生時代後期～古墳時代に機能したと推測できるが，時代を特定できないものも多い。一方掘立柱建物は，II区のSB09を除いて，現地割方向に合致する。SB08・13・14で土師器が，SB10・12で黒色土器がそれぞれの柱穴から出土した。またII区南半のSX18では，削り出し凸帯をもつ弥生時代前期の壺が多数出土した。このSX18は上記の他の遺構より下層で検出した。このほか，染付磁器が供献されていた土壙墓ST01・03・04の出土人骨は，現在香川医科大学法医学教室で鑑定中である。



第 1 図　調査区風景（II区から事務所を臨む）

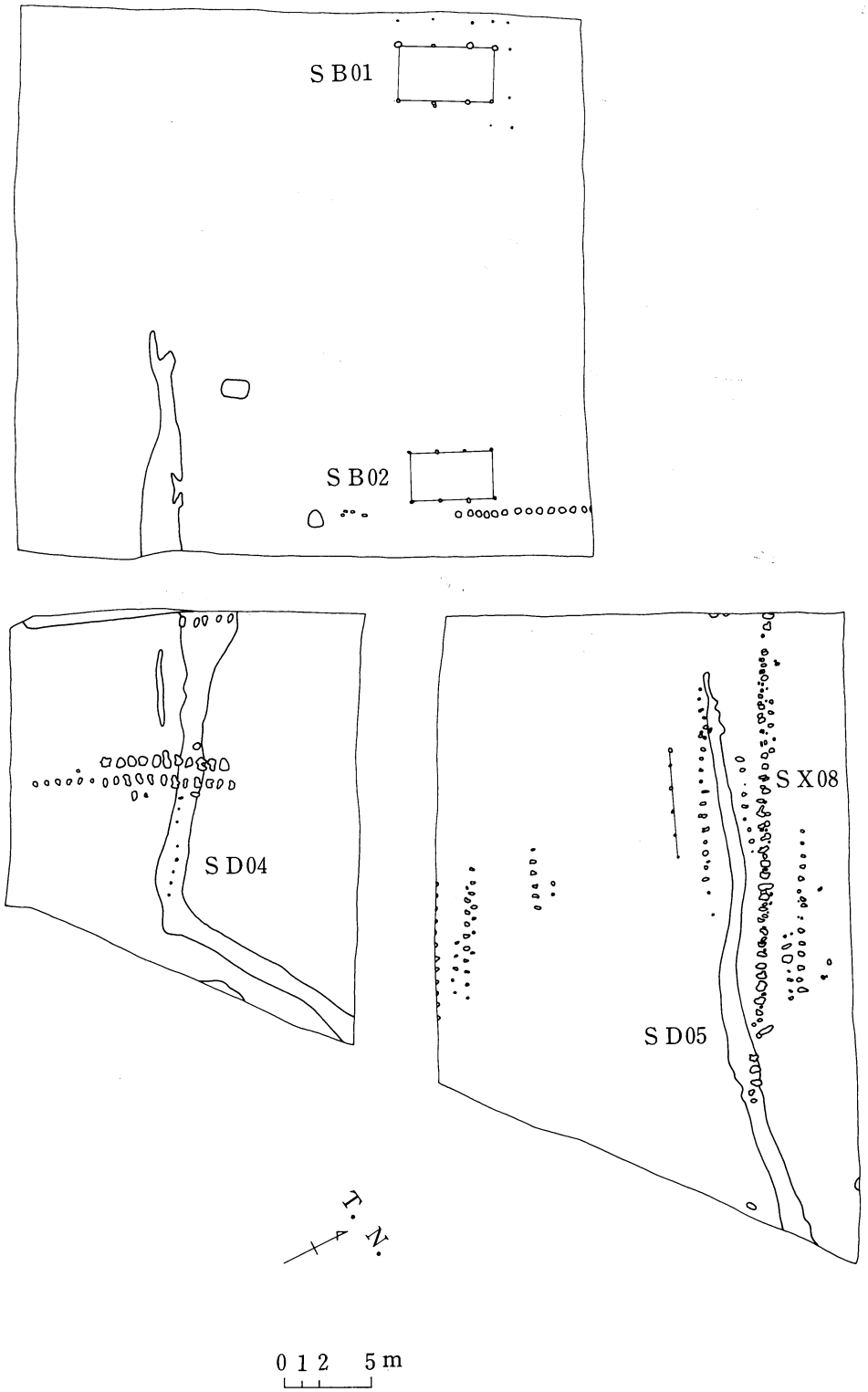
2. 刈田郡条里調査グリッド配置図



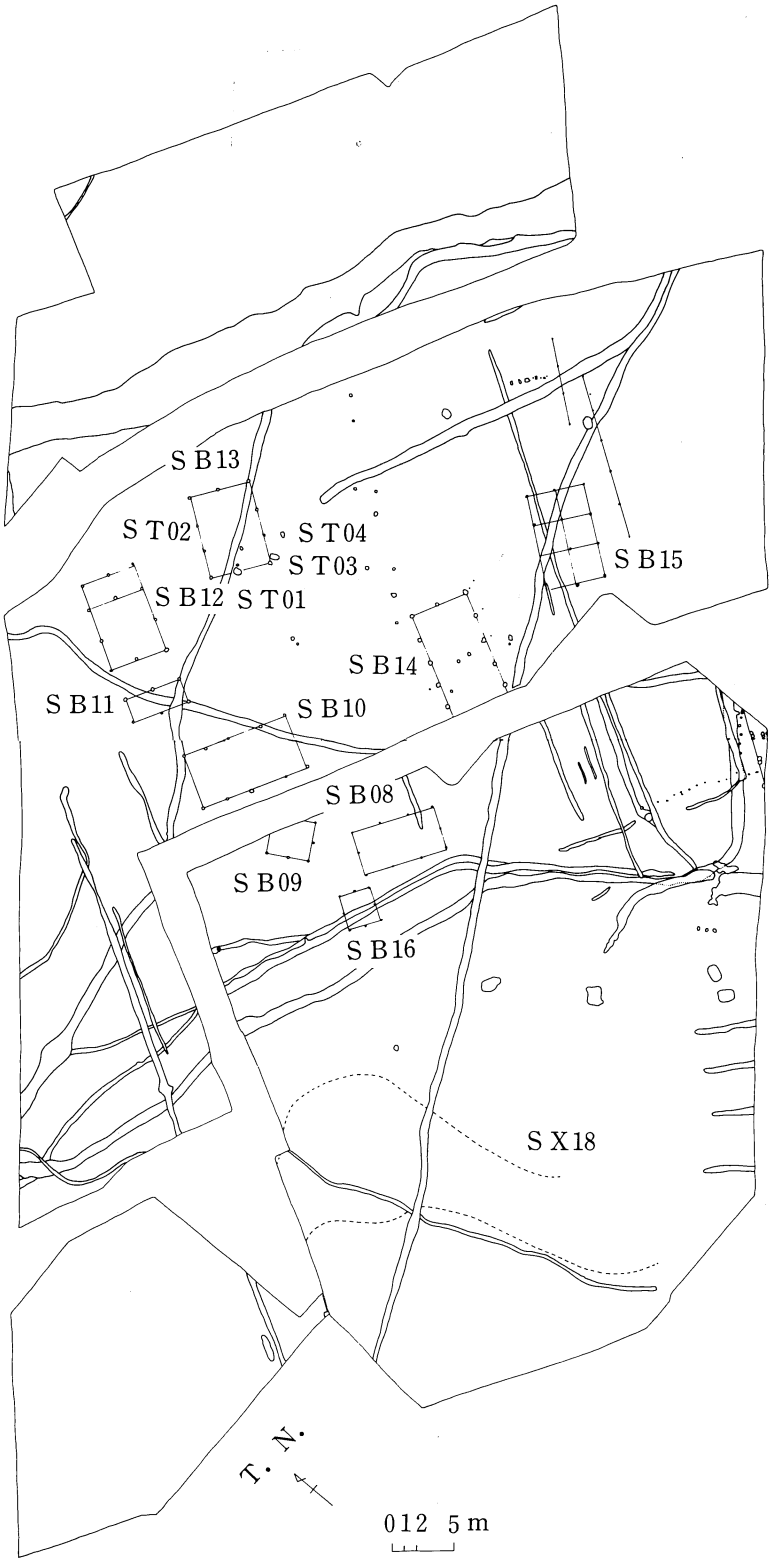
一の谷小学校
一の谷幼稚園
一の谷公民館
一の谷支所
荒魂神社
III区A
II区
I区
V区
VI区
0 20 100m
1:2500

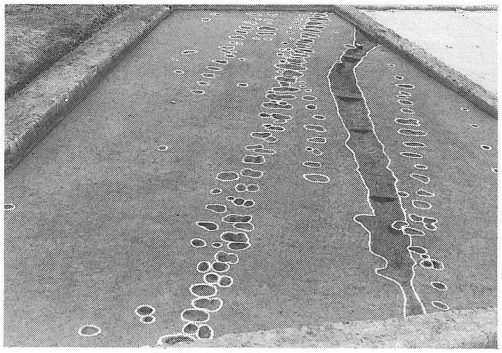
3．遺構配置図

I区

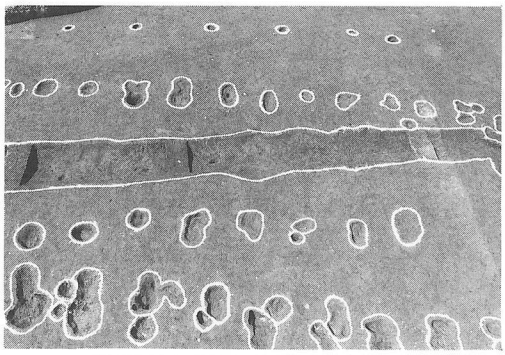


II区


S B13
S T02
S T04
S T03
S B12
S T01
S B15
S B14
S B11
S B10
S B08
S B09
S B16
S X18
T・N・
0 1 2 5 m

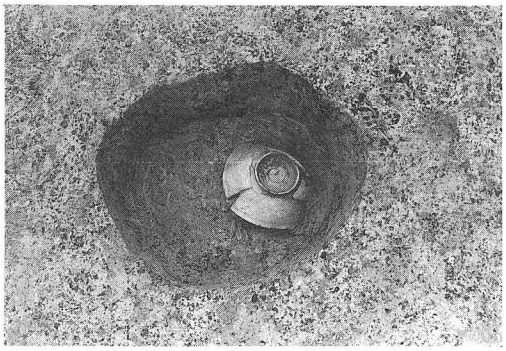


ＳＸ08とＳＤ05（西から）Ⅱ区

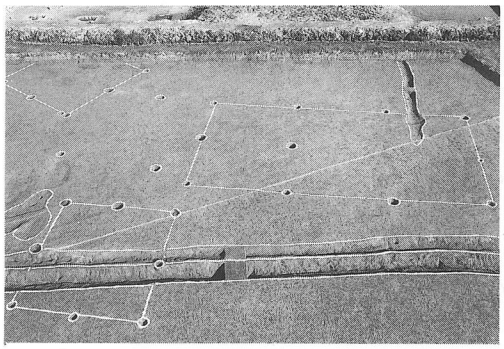


ＳＸ08とＳＤ05（北から）Ⅱ区

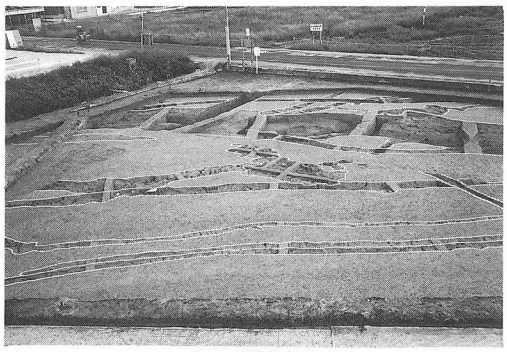
ＳＢ14（向こう）とＳＢ15（手前）（東から）Ⅱ区



ＳＢ14柱穴土器出土状況Ⅱ区

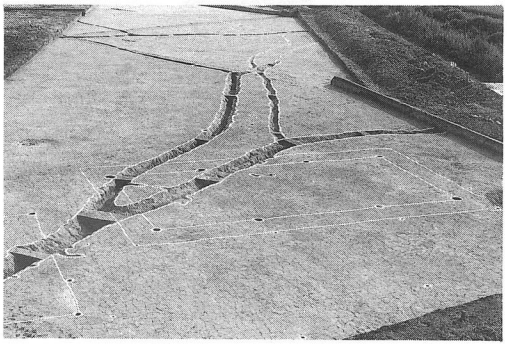


ＳＢ08（右）（南から）Ⅱ区

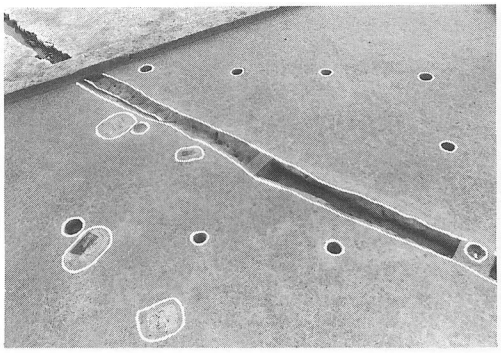


ＳＸ14（北から）Ⅲ区

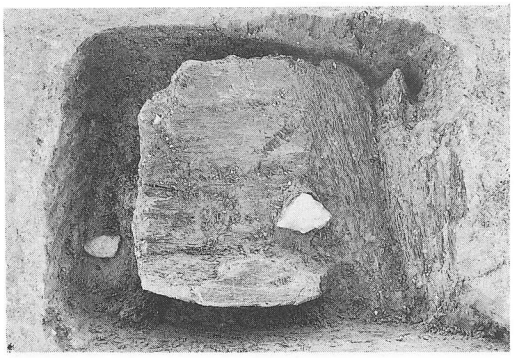
作業風景 Ⅲ区



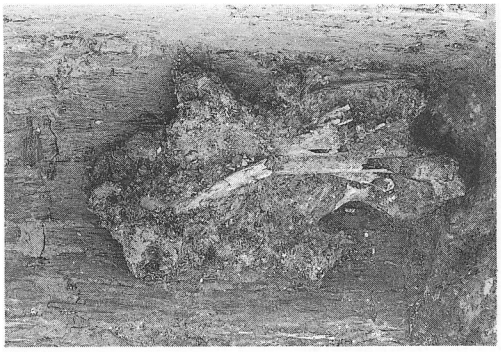
ＳＢ04（北から）Ⅳ区



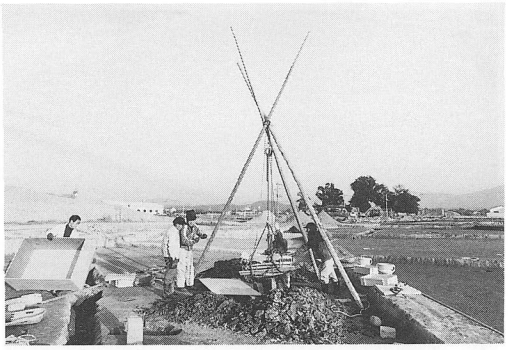
ＳＴ01～ＳＢ13（東から）Ⅱ区



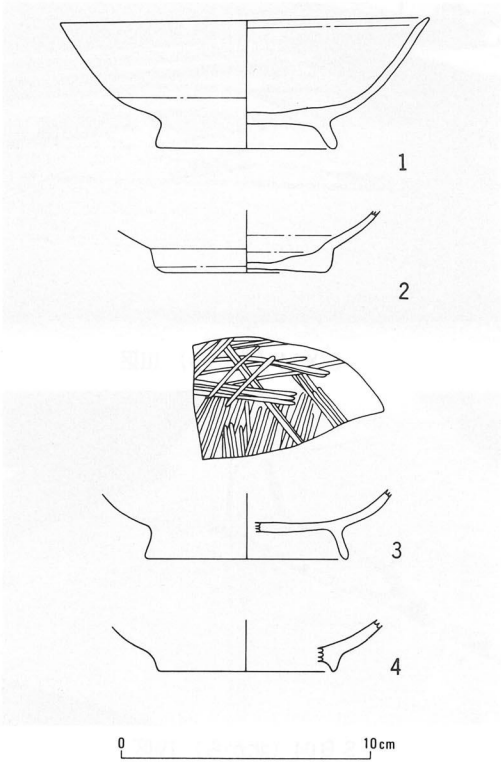
ＳＴ03木枠出土状況

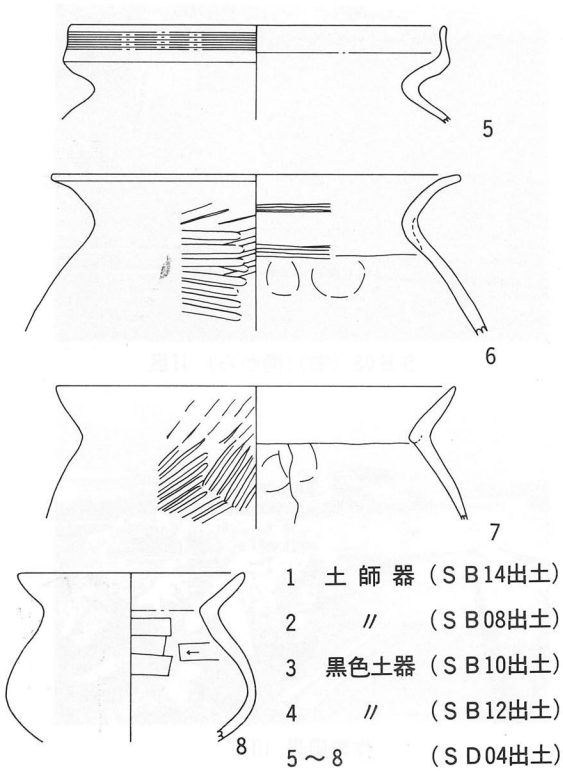


ＳＴ03人骨出土状況



ＳＴ03土坑とり上げ風景





1　土師器（ＳＢ14出土）
2　〃　（ＳＢ08出土）
3　黒色土器（ＳＢ10出土）
4　〃　（ＳＢ12出土）
5～8　（ＳＤ04出土）

遺物実測図

石　田　遺　跡

1．はじめに

石田遺跡は，西讃に広がる広大な沖積平野である三豊平野のほぼ中央部に位置する。また，観音寺市をはさんで流れる財田川と柞田川の中間地点にあたる当遺跡は，菩堤山（312m）から派生した尾根筋の裾部にある丘陵状の微高地に立地する。

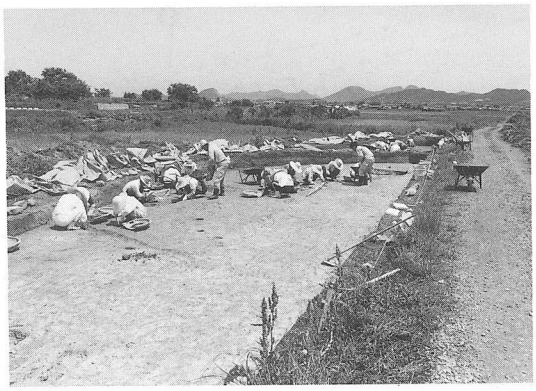
尾根筋の上位にあたる南方を望むと，香川県内でも有数の群集古墳を構える母神山（92.1m）が一望できる。また，その遠方には雲辺寺山（911m）をはじめ，阿讃山脈に連なる山々が重なっているのを展望できる。

北方に目を転ずれば，刈田郡条里が眼下に広がり，北西方向には七宝山がそびえている。

1923年（大正12年）４月17日に，観音寺市古川町の水田（刈田郡条里内）より出土したとされている，東京国立博物館収蔵の「伝古川町出土」の外縁付鈕式２区流水文銅鐸も，当遺跡から北へ約500m離れたところから出土したと伝承されており，当遺跡の丘陵部にも遺構が残存する可能性はきわめて高いと考えられた。

当遺跡の北半部は，尾根筋裾部の枝状の分岐点が形成した谷筋部分にあたり，北東方向（刈田郡条里の方向）へ丘陵から緩やかな傾斜面を形成していたものと思われる。近現代の圃場整備等で地形はかなり削平されており，旧地形の復原は困難であるが，第２図に，現状のレベルで等高線を引いた略図を載せているので，参照願いたい。略図を見ても概ね，当遺跡の地形を推測できよう。

また，当遺跡の南半部は，戦後，製瓦用の粘土を採取していたと言われており，発掘調査がすすむにつれ，耕作土直下で土層の基盤となる地山を検出したり，近現代の攪乱が広範囲に及んだりしている箇所が随所に見られたことは，埋蔵文化財を調査している者として非常に残念なことであった。



第１図　発掘作業風景

2．遺構

母神山周辺の微高地は，前述した様に良質の粘土に恵まれたため，戦後の粘土取りにより，かなり広範囲にわたり削平を受けたらしい。そのためか今回の発掘調査の結果，微高地上の高所は，耕作土直下粘土層となり，遺構は希薄であった。しかし，やや下った斜面部に比較的良好な遺物包含層を有し，掘立柱建物・溝状遺構・土坑など多数の遺構を検出した。そのうち，掘立柱建物は全部で17棟検出され，①６Ｃ末以前，②古代末～中世にかけての２時期に大別できる。

①６Ｃ末以前の掘立柱建物

ＳＢ8510～12（第４・８図）の掘り方は，全て60～70cmの不整円形で，他の建物に比べるとしっかりしている。また主軸方向もほぼ一致することから，調査区内では，特異な一群を形成している。

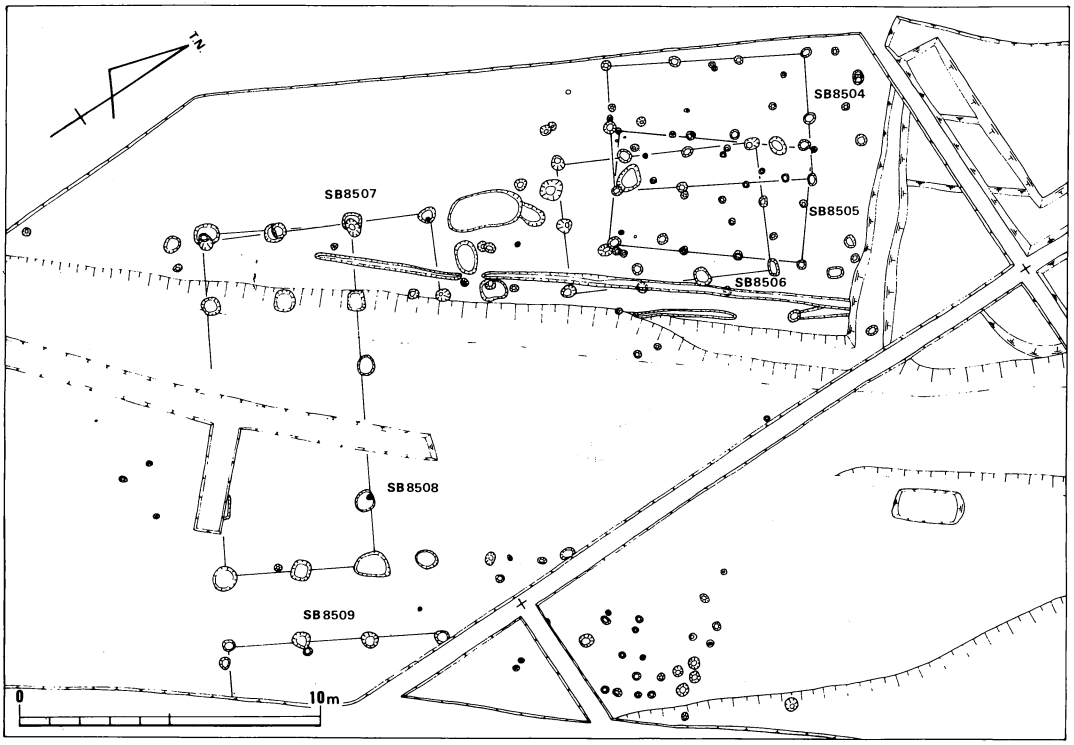
時期的には，ＳＢ8511が，６Ｃ末の溝ＳＤ8545に切られていることから，６Ｃ末以前の掘立柱建物と思われる。

②古代末～中世の掘立柱建物

ＳＢ8502，03（第７図）・04～07（第５・９図）・14（第３図）は，全て20～30cmの掘り方を持つ掘立柱建物であり，主軸は，検出された一群ごとにまとまりを見せている。

また，雨落ち溝を有するＳＢ8514なども見られる。

その他の建物遺構は，時期不明であるが，溝状遺構ＳＤ8510(第６図)については，６Ｃ末～中世にかけての遺物を包含しており，建物遺構と同時期に機能していたものと思われる。

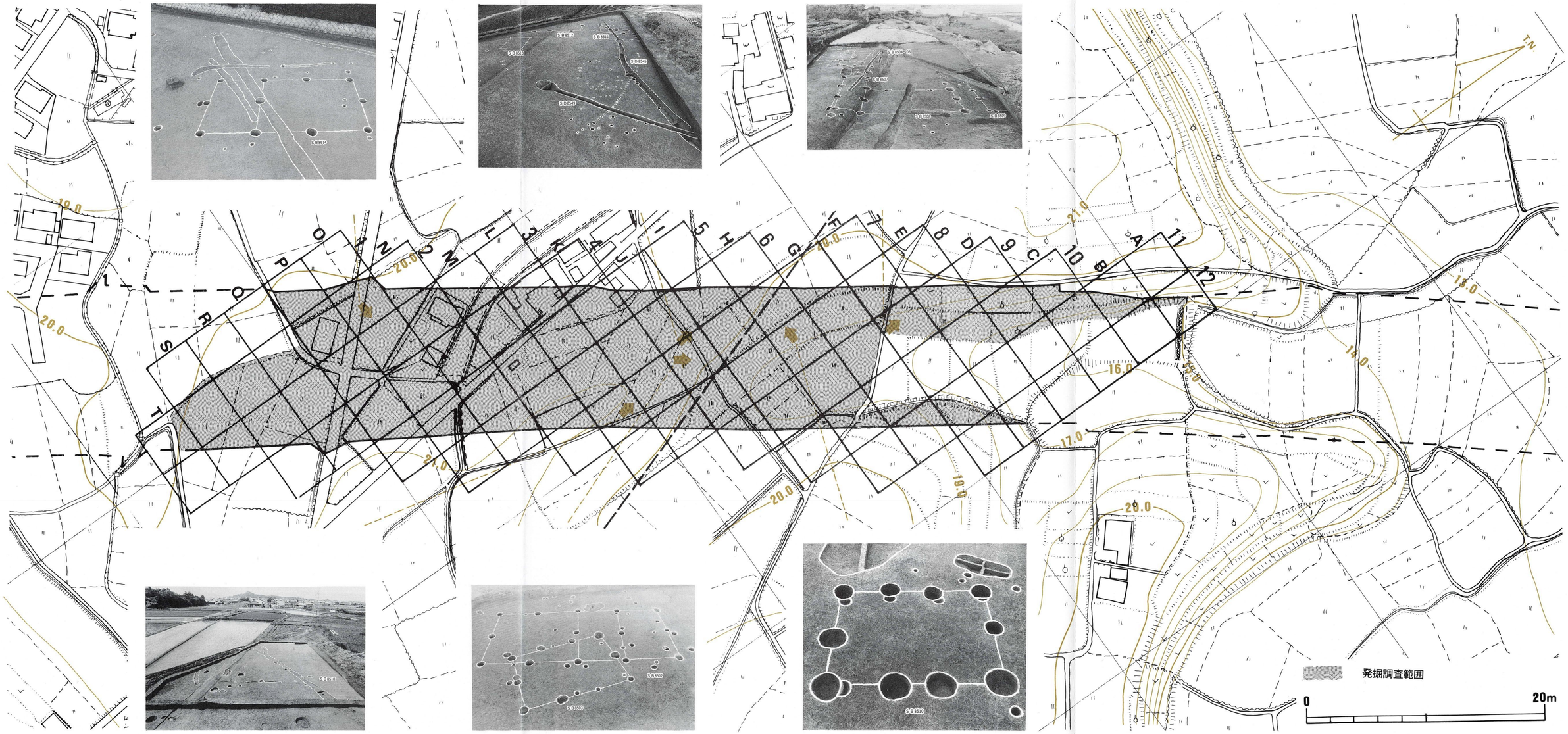


第２図　Ｅ－９，Ｆ－９遺構実測図

３．遺物

石田遺跡の調査では，各遺構及び包含層より，須恵器・土師器・緑釉・石製品などが出土した。(第10図)

まず，遺構に伴う遺物として，第９図－１はＳＤ8545から出土した須恵器坏身である。ＳＢ8510～13の時期決定の資料として使った土器で，６Ｃ末頃と思われる。



第 3 図　遺跡範囲地形図